

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

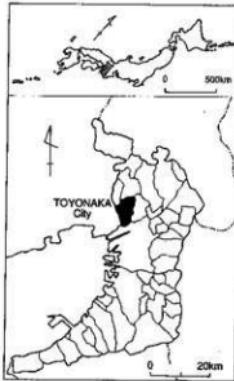
平成 10 年度(1998 年度)

平成 11 年(1999 年)3 月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 10 年度 (1998 年度)



平成 11 年 (1999 年) 3 月

豊中市教育委員会



## 序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、緑深い千里丘陵と太古からの流れを今に伝える猪名川など豊かな自然に育まれた沃野として、永らく人々の生活が営まれてきました。その一方、商都大阪の隣接地としての地理的位置から、近代化の波を最も早く受け、南北に通じる鉄道路線や高速道路など各種交通網が整備され、大阪の近郊都市あるいはベッドタウンとして急速に開発が進められてきました。近年では、近郊都市として成熟期を迎える中、土地事情の変化にともなうミニ開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財保護についての対応が求められています。

本書は、郷土の歴史、文化を検証する文化財の一つとして、埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書では、平成10年度に調査を実施した螢池北遺跡・新免遺跡・山ノ上遺跡に加え、平成9年度後期に調査を実施した小曾根遺跡・新免遺跡の成果も合わせて収録しました。小曾根遺跡では、中世後期の水路を検出し、市域南部の耕地開発の実体を明らかにする資料を提示したほか、新免遺跡では古墳時代の祭祀を物語る土馬など珍しい遺物が検出されました。また螢池北遺跡や山ノ上遺跡では、古墳の周溝とみられる遺構が検出されるなど、各遺跡で新たな知見が得られるところとなりました。

「縁豊かな生活文化都市」を標榜する豊中市としては、今後のまちづくりを進める上で、祖先から受け継いだ貴重な歴史や文化財に寄せる期待が、今後ますます膨らんでいくこと思います。本書が、そうしたまちづくりに少しでも寄与するところがあれば幸いです。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成11年(1999年)3月31日

豊中市教育委員会  
教育長 栗原有史

## 例　　言

1. 本書は、平成10年度国庫補助事業（総額4,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また平成9年度国庫補助事業、並びに平成9年度阪神淡路大震災復旧・復興事業に関する国庫補助事業として実施した新免遺跡第48次調査、小曾根遺跡第25次調査の成果を併せて収録するものである。
2. 平成10年度事業として、平成10年4月13日から平成11年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げる。
4. 本書の作成は、各報告の執筆を調査担当者が実施し、小曾根遺跡第25次調査については、出土遺物の項を服部（古墳）と橋田（中世）が分担した。また全体の編集を服部聰志が実施した。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N. は磁北、N は真北を、また表記のないものは、国土座標系に基づく座標北を示す。また各挿図に掲載した座標は、国土座標第VI系に基づく。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。
7. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成9年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
小曾根遺跡 (震災関連)	第25次	小曾根1-446-2他	117m <sup>2</sup>	清家 章	1998年2月17日 ～3月20日
新免遺跡	第48次	玉井町3-81-3	77m <sup>2</sup>	橋田正徳	1998年3月2日 ～3月20日

平成10年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
螢池北遺跡	第22次	螢池北町3-86-6	60.14m <sup>2</sup>	橋田正徳	1998年4月16日 ～4月30日
新免遺跡	第49次	玉井町3-81-1	75m <sup>2</sup>	橋田正徳	1998年6月 1日 ～6月30日
山ノ上遺跡	第14次	立花町1-63	81.5m <sup>2</sup>	服部聰志	1998年7月 1日 ～7月31日
山ノ上遺跡	第15次	宝山町20	11.4m <sup>2</sup>	清水 篤	1998年9月16日 ～9月30日

# 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(服部)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 小曾根遺跡第25次調査	(清家・橋田・服部)
1. 調査の経緯	5
2. 調査の概要	
(1) 既往の調査	5
(2) 検出した遺構	6
(3) 出土遺物	8
3.まとめ	12
第Ⅲ章 新免遺跡第48・49次調査	(橋田)
1. 調査の経緯	13
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	15
(2) 弥生時代の遺構と出土遺物	15
(3) 古墳時代の遺構と出土遺物	25
(4) 奈良時代の遺構と出土遺物	32
3.まとめ	34
第Ⅳ章 蛍池北遺跡第22次調査	(橋田)
1. 調査の経緯	35
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	35
(2) 検出した遺構	36
3.まとめ	37
第Ⅴ章 山ノ上遺跡第14次調査	(服部)
1. 調査の経緯	39
2. 遺跡の概要	40
3. 調査の成果	
(1) 基本層序	40
(2) 検出した遺構・遺物	41
4.まとめ	47

第VI章 山ノ上遺跡第15次調査	(清水)
1. 調査の経緯	49
2. 調査の成果	
(1) 既往の調査	49
(2) 検出した遺構	51
(3) 出土遺物	52
3.まとめ	52

## 挿 図 目 次

(第I章)	
第1図 市内遺跡分布図	2
第2図 調査地点と周辺地形	4
(第II章)	
第3図 調査範囲図	5
第4図 調査地点位置図	5
第5図 井戸1立面図	6
第6図 第1面遺構平面図	7
第7図 第2面平面図	8
第8図 井戸1出土遺物	9
第9図 溝1~3出土遺物	9
第10図 土坑1出土遺物	10
第11図 落ち込み1出土遺物	11
第12図 包含層出土遺物	12
(第III章)	
第13図 調査範囲図	13
第14図 調査地点位置図	13
第15図 調査区平面・断面図	14
第16図 弥生時代の主要な遺構	15
第17図 住居1平面・断面図	17
第18図 住居1 炉周辺土器出土状況	16
第19図 住居1出土遺物	17
第20図 溝1・2平面・断面図	18
第21図 溝2土器出土状況	18
第22図 溝2中層出土遺物1	19
第23図 溝2中層出土遺物2	20
第24図 溝2下層出土遺物1	21
第25図 溝2下層出土遺物2	22
第26図 溝2下層石斧出土状況	22
第27図 溝2下層石包丁出土状況	22
第28図 溝2下層出土遺物3	23
第29図 溝3・4平面・断面図	24
第30図 溝4土器出土状況	24
第31図 溝3・4出土遺物	24
第32図 古墳時代の主要な遺構	25
第33図 住居2平面・断面図	26
第34図 住居2・3出土遺物	27
第35図 土坑1平面・断面図	27
第36図 溝5平面・断面図	27
第37図 土坑1・溝5出土遺物	28

第38図 溝6平面・断面図	28	(第V章)	
第39図 溝6出土土馬	29	第50図 調査範囲図	39
第40図 溝7平面・断面図	30	第51図 調査地点位置図	39
第41図 溝7出土遺物	31	第52図 調査区平面・断面図	41
第42図 溝8出土遺物	32	第53図 地輪出土状況平面・断面図	42
第43図 奈良時代の主要な遺構	33	第54図 塙輪	44
第44図 土坑2・溝9・落ち込み1 出土遺物	33	第55図 土坑2平面・断面図	46
第45図 SP-56付近出土石包丁	34	第56図 砥石	46
(第IV章)		第57図 出土土器	47
第46図 調査範囲図	35	(第VI章)	
第47図 調査地点位置図	35	第58図 調査範囲図	49
第48図 調査区平面・断面図	36	第59図 調査地点位置図	49
第49図 溝1断面図	37	第60図 検出遺構平面・断面図	50
		第61図 出土遺物	51

## 図 版 目 次

- 図版1 小曾根遺跡第25次調査  
 (1) 第1面南半部全景(南から)  
 (2) 第2面全景(南から)
- 図版2 小曾根遺跡第25次調査  
 (1) 溝1全景(西から)  
 (2) 溝1断面(東から)  
 (3) 溝1内木材出土状況(西から)  
 (4) 井戸1  
 (5) 井戸1側面  
 (6) 土坑1土器出土状況  
 (7) 落ち込み1土器出土状況
- 図版3 小曾根遺跡第25次調査  
 (1) 溝1出土遺物  
 (2) 井戸1出土遺物
- 図版4 小曾根遺跡第25次調査  
 (1) 土坑1出土遺物  
 (2) 落ち込み1出土遺物  
 (3) 包含層出土遺物
- (3) 包含層出土遺物
- 図版5 新免遺跡第48・49次調査  
 (1) 遺構完掘状況(第49次調査区北部)  
 (2) 遺構完掘状況(第49次調査区南部)
- 図版6 新免遺跡第48・49次調査  
 (1) 遺構完掘状況(第48次調査区)  
 (2) 住居1完掘状況(南から)
- 図版7 新免遺跡第48・49次調査  
 (1) 住居1土層断面  
 (2) 住居1整溝断面  
 (3) 住居1土器出土状況  
 (4) 住居1炉断面  
 (5) 住居1炉上層土器出土状況
- 図版8 新免遺跡第48・49次調査  
 (1) 溝2中層土器出土状況  
 (2) 溝2下層土器出土状況

- 図版9 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 溝1・2土層断面  
(2) 溝4土器出土状況
- 図版10 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 住居2完掘状況(第48次調査区)  
(2) 住居2完掘状況(第49次調査区北部)
- 図版11 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 土坑1土器出土状況(西から)  
(2) 溝6(南から)
- 図版12 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 溝7土層断面(第48次調査区)  
(2) 溝5完掘状況(東から)  
(3) 溝7土器出土状況(第48次調査区)  
(4) 溝8土器出土状況(北から)
- 図版13 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 住居1出土遺物  
(2) 溝2下層出土遺物
- 図版14 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 溝2中層出土遺物  
(2) 溝6上層出土遺物
- 図版15 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 住居2出土遺物  
(2) 住居3出土遺物  
(3) 土坑1出土遺物  
(4) 溝7出土遺物  
(5) 溝8出土遺物  
(6) 土坑2出土遺物
- 図版16 新免遺跡第48・49次調査  
(1) 溝2下層出土石包丁
- (2) SP-56付近出土石包丁
- 図版17 蛍池北遺跡第22次調査  
(1) 遺構完掘状況(北から)  
(2) 溝1断面
- 図版18 山ノ上遺跡第14次調査  
(1) 古墳時代遺構(東から)  
(2) 古墳周溝 墓輪出土状況(南から)
- 図版19 山ノ上遺跡第14次調査  
(1) 中世遺構検出状況(東から)  
(2) 中世遺構完掘状況(東から)
- 図版20 山ノ上遺跡第14次調査  
(1) 溝1(南から)  
(2) 土坑1断面(南東から)
- 図版21 山ノ上遺跡第14次調査  
(1) 柱穴断面  
(2) 調査区北壁土層断面
- 図版22 山ノ上遺跡第14次調査  
(1) 墓輪
- 図版23 山ノ上遺跡第14次調査  
(1) 中世土器
- 図版24 山ノ上遺跡第15次調査  
(1) ピット11断面(北から)  
(2) ピット19・竪穴住居3断面(西から)
- 図版25 山ノ上遺跡第15次調査  
(1) ピット14土器出土状況(南から)  
(2) 遺構完掘状況(西から)
- 図版26 山ノ上遺跡第15次調査  
(1) 竪穴住居3・ピット8出土遺物  
(2) ピット14出土遺物

## 第Ⅰ章 位置と環境

### 1. 地理的環境

豊中市は、古代豊島郡の南部に位置し、隣接する鶴下・鶴上郡、河邊郡などとともに畿内五カ国の一つ、摂津国を構成する。市域の北部には、万葉集にも名高い島熊山を頂点とした穏やかな山地形が連なり、その南側一帯には東大寺、春日大社など寺社勢力の莊園支配の舞台ともなった広大な平野部が展開する。市域の西側を南流し、庄本付近で神崎川に合流する猪名川は、摂津国を大きく東西に分ける地理的区分の境界をなすが、古代より能勢の良材の主要な運搬路となるなど、交通に果たした役割もまた大きい。南は茨木山中に源を発する神崎川が、淀川の傍流中津川と平行して流れ下り、市域を限る境界ともなっている。また能勢街道や三国街道など豊中市域を南北に通る主要な街道は、この三国川（神崎川）を越える渡しを通じて、商都大阪に結ぶ動脈として機能した。この市域南部は繩文海進の頃をピークに、弥生時代以来中世まで、海岸線が大きく変動する地形変化の著しい地域としても知られる。平野の深部に伏在する基盤層の形状は、沖積層上部の起伏を決定づける要因となり、現在の服部西町を中心とする付近は、昭和の20年代に至っても、河川の氾濫に伴う堤防決壊の際、水難被害の最も著しい場所でもあった。このような状況に対処するために、近世から近代にかけて、悪水対策の一貫として、数多くの水路が開削されたが、原田村から庄本村にかけて開削された最も大規模な水路が、現在親水路として市民の憩いの場所ともなっている豊能南部用排水路である。また旧穂積村の周囲にめぐらされた囲い堤は、その營造年代が未だ明らかでないとはいえ、水害からの防御を目的に營まれた頗るな輪中造構として注目される。その他、市域南部には東西、南北方向に数多くの用・排水路が營まれたが、農耕地の激減と、生活様式の変化、下水道の整備等に伴って使命を終え、多くが暗渠となり、さらに跡地が緑道として整備されることにより、市民生活に新たな潤いをもたらしている。なお市域の東側は、天竺川とともに天井川として知られる高川を境界に現吹田市と接する。

### 2. 歴史的環境

今年度に調査を実施した4つの遺跡の中で、新免、山ノ上、螢池北の3遺跡は、いずれも市域北部の丘陵部、標高20~30mの、比較的起伏の乏しいながらかな低位段丘上に立地する。一方、小曾根遺跡は、通称豊中台地直下の平野北部に位置する低地性の集落である。ここでは4つの遺跡を中心に、関連する各時代の様相について述べることとしたい。

**弥生時代** 丘陵上に立地する弥生時代集落を水系別にみると、螢池北遺跡が箕面川水系、新免、山ノ上、曾根・原田遺跡が千里川水系に属する。この中で集落の形成が最も早いのは山ノ上遺

## 2. 歴史的環境



1. 太鼓塚古墳群
2. 西湘春日町古墳群
3. 研堀遺跡
4. 野湘赤日町遺跡
5. 少路遺跡
6. 桜井谷石器散布地
7. 利裏下池南塗跡
8. 神奈山古墳
9. 神蒙山溝跡
10. 内田遺跡
11. 梅原遺跡
12. 北ノ側山遺跡
13. 長井谷窯跡群
14. 家池北遺跡
15. 弓削東墓葬
16. 雲汲西塗跡
17. 雲汲遺跡
18. 麻田御所恩跡
19. 南刀根山塗跡
20. 御井山大塚
21. 上野遺跡
22. 落野田塗跡
23. 金寺山塚古墳
24. 新免宮山古墳群
25. 金寺山寺社利柱建石
26. 本町遺跡
27. 鮫兔遺跡
28. 芙輪東遺跡
29. 芙輪遺跡
30. 山ノ上遺跡
31. 犬介遺跡
32. 荒町北塗跡
33. 荒町塗跡
34. 国町南遺跡
35. 長塚古墳群
36. 下原塚古墳群
37. 長浜寺塗跡
38. 傘塚古墳
39. 墓納敷布施
40. 原田西塗跡
41. 藤部遺跡
42. 藤部東遺跡
43. 原田城跡
44. 原田塗跡
45. 香川遺跡
46. 香根東遺跡
47. 原田中町遺跡
48. 原田大町遺跡
49. 墓輪塚跡
50. 立島北遺跡
51. 立島南遺跡
52. 猪山塗跡
53. 猪部塚跡
54. 若竹寺塗跡
55. 石藏寺櫻寺
56. 寺内塗跡
57. 利倉北塗跡
58. 利倉南塗跡
59. 利倉南塗跡
60. 利倉西塗跡
61. 佐亞の坂遺跡
62. 旗張塚跡
63. 横移遺跡
64. 脱猿村圓堤
65. 小曾根遺跡
66. 春日大社南部代合西氏氏庭
67. 北条塗跡
68. 上津馬川塗跡
69. 上津馬遺跡
70. 上津島南遺跡
71. 德宿ポンプ場塗跡
72. 鳥田塗跡
73. 庄内塗跡
74. 鳥江塗跡

第1図 市内遺跡分布図（1：50000）

跡で、弥生前期の溝から前期中段階の土器とともに縄文晩期（長原式）の土器が出土した。勝部遺跡とほぼ同時期に、丘陵部でも該期の集落が営まれたことを示すとともに、当地域においても他地域と同様、弥生文化が在來の縄文文化の担い手たちと軋轢を生じることなく、スムーズに受け入れられたことを示している。中期については、第1次調査で遺物の出土が知られる以外、集落の様相を明らかにする具体的な遺構はこれまでに検出されていない。したがって前期に出現した集落は、必ずしもその後規模を拡大・発展させることなく、中期集落へと継続したものとみられる。一方、後～終末期になると、各次調査地点で検出される豊富な遺構、遺物が示すように、集落規模の急速な拡大が認められる。該期の集落におけるかのような変化の様相は、南部の穂積、股部遺跡等についても指摘され、該期の社会動向を考察する上で重要な要素の一つである。また山ノ上遺跡の北方に位置する新免遺跡は、集落の形成が中期初頭に始まり、山ノ上遺跡にやや遅れるものの、以後後期まで集落規模を拡大させながら発展する集落である。想定される集落規模、検出された遺構の数、存続期間などは、いずれも山ノ上遺跡を凌駕しており、勝部遺跡と並び千里川水系の中核的集落と目される。

**古墳時代** 近年、市内數カ所の遺跡において、小規模な古墳の検出が相次いでいる。螢池北、利倉南、烏田の各遺跡があり、出土した須恵器の型式はいずれもTK208～23型式頃に比定される。当該期は桜塚古墳群の衰退期とも微妙に重複する時期に相当し、おそらくこの5世紀後半を境に、社会的分業の進展に伴って、古墳を築きうる新たな階層が当該地域においても出現したことを見ると理解される。一方、6世紀前半を中心にして築造された新免古墳群は、政治的段階としてはこれに統くものと評価されよう。おそらく繼体天皇の擁立に象徴される北摂地域が勢力を増す中で、桜井谷窯跡群の須恵器生産体制も再編され、須恵器生産管掌者たる新免集落經營主体の社会的地位が以前にも増して高められた結果に他ならないと考えられる。今回山ノ上遺跡で検出された古墳の周溝とみられる遺構は、この新免古墳群と同時期に属し、古墳群の範囲推定に再考を促すものとなった。

**中世** 丘陵部における中世集落として、螢池東遺跡、熊野田遺跡、山ノ上遺跡、曾根・原田遺跡があげられる。時期は螢池東、曾根・原田遺跡が11世紀後半、熊野田遺跡が14世紀で、丘陵の開発が必ずしも一律なものではなく、各小地域が在地領主の性格、交通、経済基盤など多様な要素によって競争的に展開したものであったと推定される。とくに山ノ上遺跡において、第12次調査以降明らかになりつつある11世紀後半の集落は、文献にみえる止止岐荘の成立との関連において示唆に富んでおり、丘陵部における莊園村落の成立と耕地開発の具体像を探る上で、今後の調査に期待されるところが大きい。一方低地に所在する小曾根遺跡は、垂水西牧坂郷六ヶ村の一つに数えられる。集落の形成は11世紀中頃に遡り、中世後期をへて近世に続いた。14世紀後半以降、集村化の傾向とともに、集落内外において比較的大規模な水路の開削が行われ、可耕地の拡大と耕地の再整理が図られたとみられる。今回報告する中世後期の水路も、沖積地における用排水の中世的なあり方を考える上で、重要な資料を提示したものといえよう。

2. 歷史的環境



第2図 調査地点と周辺地形 (1 : 40000)

## 第Ⅱ章 小曾根遺跡第25次調査の概要

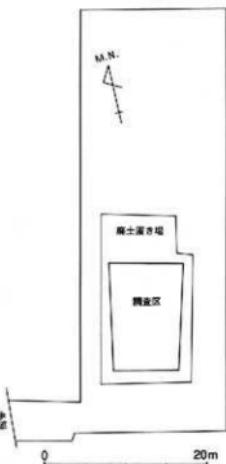
### 1. 調査の経緯

当調査区は、豊中市小曾根1-446-2に所在する。共同住宅の新築に先だって試掘調査を行なったところ、遺構面と遺物包含層が検出された。試掘調査の結果によれば、建設予定地の南半部で遺構が多く遺存し、北半では遺構が検出されなかつた。そのため調査区を建設予定地の南半部に限って設定した。調査期間は、平成10年（1998年）2月17日から3月20日で、調査面積は117m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査の概要

#### （1）既往の調査

小曾根遺跡では、これまでに24回の調査が行なわれており、弥生前期～中世にわたる各時期の遺物や遺構が検出されている。本地点の西側にあたる第18次調査地点では、中世の粘土探掘坑および掘立柱建物とともに、古墳時代前期から後期の土器が検出され、この付近が古墳時代の集落域になっていたことが推定されている<sup>⑩</sup>。また、第20次調査地点のさらに



第3図 調査範囲図（1：600）



第4図 調査地点位置図（1：5000）

## 2. 調査の概要

西側には、南郷目代の今西氏屋敷が存在し、かつ当調査地点の北側の第13次調査地点などでも、鎌倉～室町時代の集落・溝・墓が検出されており、中世村落の動向も見過ごすことができない。

### (2) 検出した遺構

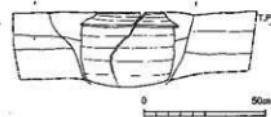
遺構面は2面以上存在すると考えられる。第1面は鎌倉から室町時代にかかる遺構面であり、その下に古墳時代遺構面の第2面がある。まず第1面の遺構精査時に、東西に走る溝1と南北に走る溝2を確認した。本調査区の廃土置き場は狭く、かつ人力で廃土を移動せざるを得ない状況下にあったため、これらの大溝の掘削廃土により廃土置き場が満たされ、第2面の遺構掘削時に支障をきたすことが予想された。そこで、本来ならば第1面の遺構をすべて掘削した後に、第2面の遺構を調査すべきところを、溝1と溝2の掘削を第2面調査後に行なうこととした。そして、調査を完了した範囲に溝の掘削廃土を置く方針をとったのである。そのため、第1面の遺構である溝1と溝2が第2面の遺構と同じ写真図版に収まることになったが、これは上記のような理由による。なお、結果的に第2面の遺構は少なく、結果的にすべての廃土は所定の廃土置き場に置くことができた。以下に主な遺構の記述を進める。

第1面は鎌倉時代から室町時代の遺構面と考えられる。調査区の中央を東西に走る溝1は、重複関係にある遺構のすべてに後出しており、この面でもっとも新しい遺構の1つである。溝の幅は4.0m、深さ1.1m。溝中より大量の木材が出土している。これらの木材は建物廃材と考えられる。溝中からは他に瓦当を含む瓦片や瓦器、少量の羽釜片等が出土しており、これらの特徴から室町時代に属すと考えられる。当調査地点の北320mに所在する第24次調査地点では、溝1ときわめて類似した溝が南北方向に掘削されていた。溝1がこの溝と関連する可能性は高い。この想定が認められるのならば、この溝は大きな地割りに関する性格を持つと考えられる。

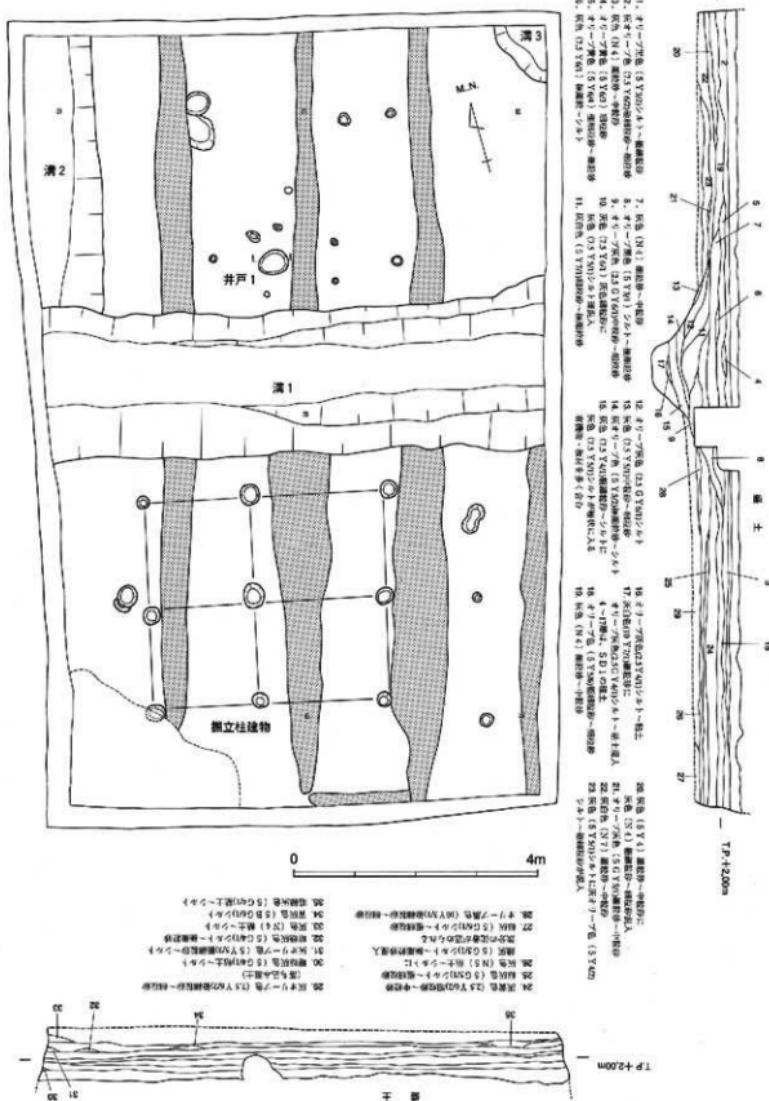
溝1の南側には掘立柱建物が検出されている。南北3.5m(2間)、東西4.0m(2間)の総柱建物である。検出された柱穴の掘形は浅く、本来はもう少し上面から掘削されていたと考えられる。柱穴からの出土遺物はなく、時期を決定することは難しい。溝1の北側にある井戸1との関連が考えられる。井戸1は直径60cmの掘形に底部を欠いた羽釜を1個据え置いたものである。掘込み面は検出面より上の可能性が高く、羽釜も何段か積まれていたことが予想される。

溝2は南北に流れる溝で、深さは60cm以上を計る。溝2は溝1と交錯するが、重複関係ならびに出土遺物から溝2が溝1よりも古いことは明らかである。溝中から瓦器が出土している。

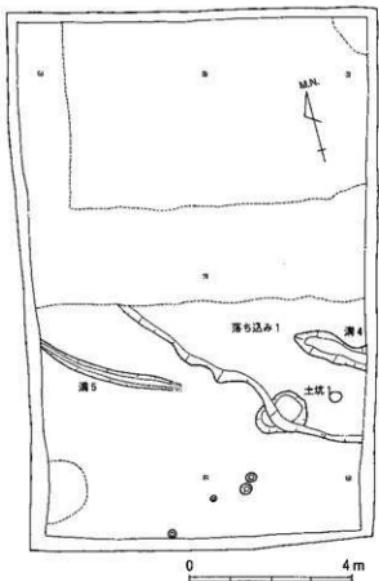
奇妙なことに、溝2は溝1を境にして南には連続しない。このことから、2つの可能性が予測される。一つは、溝1との合流地点で溝2が屈曲する。もう一つは、溝2が機能していた時に、溝1の場所に同じように東西に走る流路があり、溝2が埋没したしばらく後に東西流路だけが再掘削されて溝1が作



第5図 井戸1立面図



## 2. 調査の概要



第7図 第2面平面図（1：120）

られたとする想定である。いずれにしても溝1が走る東西の線は、地割りあるいは何らかの境界として鎌倉時代から認識されていた可能性がある。

また、調査区全面には幅35～70cm程度の浅い溝が等間隔に並んでいる様子が認められた。溝と溝の間はわずかに高まりが認められ、この高まりは畑の畝の跡ではないかと考えられる。これらの溝は、重複関係からみて、溝1や溝2、あるいは掘立柱建物などが作られる前の溝である可能性が高い。この地に、集落以前には田畠が広がっていた可能性を示すものである。

この第1面の下約10cmの深さから、古墳時代の遺構面が検出された（第7図）。調査区の中央やや南から調査区の北半にかけて、浅く広い落ちが認められ、ここから古墳時代前期から後期までの土器が出土している。この落ち込みを掘り下げると、土坑

1や溝4などの遺構が検出された。

土坑1は、直径100cm、深さ28cmの円形の土坑である。ここからは庄内甕や高杯などが出土した。これらは古墳時代前期の遺物と考えられ、本来この場所には古墳時代前期の遺構が広がっていたことが予想される。しかし、その多くは削平され、削平時の落ち込みに土器片とともに土砂が堆積し、落ち込み1が形成されたと推測される。

### （3）出土遺物

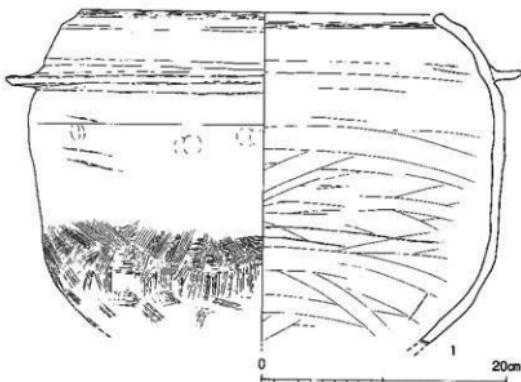
溝1 溝1からは第9図6～10が出土した。このうち9、10は遺構面上で出土したものであるが、溝1から出土した可能性が高いことから、溝1出土遺物と同様にあつかうこととした。

このうち、6は和泉型瓦器椀、7は土師器羽釜、8～10は平瓦である。6は、口径11.8cmに復元できる。内面にわずかながら圓線状の暗文が認められるが退行が著しく、IV～I期頃にかけての所産と考えられる。7は復元径27.1cmをはかる。内傾化した口頭部と体部との境界にはほぼ水平方向の鈎が貼り付けられている。また、口頭部中位にはやや不明瞭な段が認められ、また内面にはあらいハケを施す。8、9は平瓦の瓦当である。いずれも定型的な唐草文である。平瓦部との接合部分は欠損しているため、接合部の特徴は明確ではないがほぼ垂直に近い屈曲

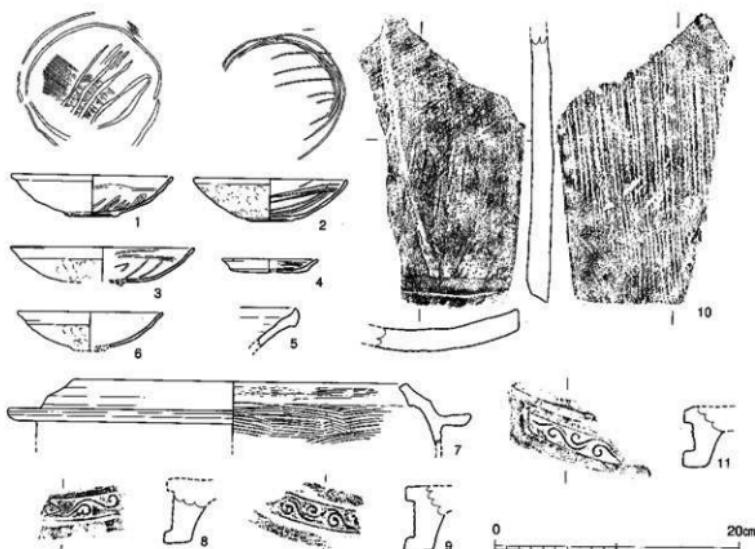
を呈する可能性が想定でき、14世紀後半以降、おそらくは15世紀代の所産と考えられる。10は凹面に布目痕を、凸面に叩き痕を残す。叩きには繩叩きが用いられ、布目痕の一部に布の合わせ目ともみえる痕跡が確認できる。10は、その

特徴からみて14世紀以前と考えられる。

溝1の出土遺物は時期にまとまりがかかるものの、おおむね14~15世紀の時期にかけての所産と推定できる。また、その特徴から溝1が長期にわたって機能する性格を有していたものと



第8図 井戸1出土遺物 (1:4)



第9図 溝1~3出土遺物 (1:4)

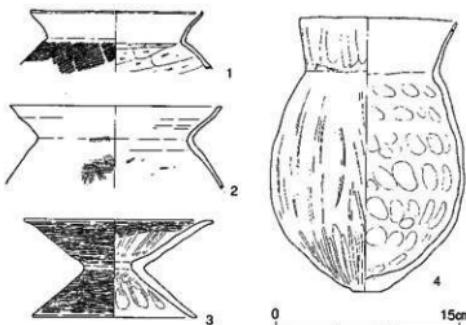
## 2. 調査の概要

考えられる。

井戸1 井戸1からは井筒に使用された土師質の羽釜（第8図1）に限られる。1は、内傾する口頭部と体部の境界に水平に伸びる鉗が貼り付けられ、口頭部には不明瞭な段が認められる。体部内面は板状工具で丁寧なナデが施されるが、外表面は一部にハケを施すものの下半部には成型時の叩き痕が残されている。また、体部下半には煤が付着しており羽釜が転用されたことを示す。なお、1は第9図7と同様に市内では類例がなく時期を明確にすることは難しいが、器形的には中河内のものと類似しており15世紀代の所産と考えられる。ただ、体部下半に叩きを残すなど在地的な特徴が現れていることは注意されよう。

溝2 第9図1～5にあげた和泉型瓦器、東播系須恵器などが出土している。1～3は和泉型瓦器碗で、このうち1は口径13.2cm、器高3.4cmを、2は口径12.6cm、器高3.2cmを有する。いずれも内面には形骸化した圓線状ミガキを、見込みには5条前後の平行線状の暗文を施す。また、高台は粘土紐を輪状に貼り付けるが、ナデによる調整はない。瓦器はIV-1期の所産である。なお、4の瓦器皿と5のこね鉢は混入品と考えられる。

土坑1（第10図1～4） 庄内窯を含む古墳時代初期頃の一括性の高い土器で、器種として土師器の壺、器台、壺がある。1の庄内式壺は、口縁部から体部上半がほぼ完存する。口径14.0cm、残存高4.6cmで、張りのある丸い体部より口縁部が「く」の字に屈曲し、わずかに外反しながらのびる。口縁端部の残りは悪いが、約2mmの高さではほぼ垂直につまみ上げる。口縁部外面下半の一部にタタキの痕跡を残す他、口縁端部直下に指頭痕が連続してみられる。体部は、幅約2mmの非常に細かい右上がりのタタキによる成形痕を残し、内面はシャープなケズリを口縁部との境界ぎりぎりにまで施す。器壁は全体に薄く、約3～4mmである。器面は全体にくすんだ黄灰色を呈し、体部から口縁部外面にかけて薄くススが付着する。胎土はやや粗く、2mm以下の長石、石英と極少量のクサリ礫を含む。2の布留式壺は口縁部から体部上半の破片で、5



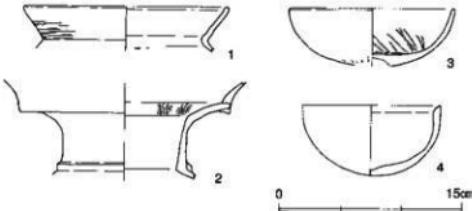
第10図 土坑1出土遺物（1：4）

分の1程度を残す。口縁部の屈曲は鈍く、やや内翻気味にのびる。端部には肥厚がみられず、幅の狭い水平面をなす。調整は内外面ともにヨコナデによる。体部は外面を細かい斜めハケの後、横方向のハケにより調整する。内面は水平もしくは右斜め上がりのケズリを行う。3は小型の器台である。ほぼ完形を保ち、口径16.0cm、脚径13.4cm、器高8.0cm。受部は下部に若干

膨らみをもって直線状にのび、口縁端部は水平方向に短く引き伸ばされる。外面は横もしくはやや斜め方向の非常に細かいミガキ、内面は上半部に横方向のミガキ、下半はナデのち幅3~5mmの板状工具による放射状の調整痕が観察される。この調整痕は一見ミガキ状を呈するが、調整面が粗面をなし、砂粒の移動が認められる。脚部はほぼ直線状に開き、端部は丸くおさめる。外面は細かいミガキ、内面は縦位の指頭痕、および受部と同様のミガキ状の調整痕を認める。また脚部上端の一部にケズリの痕跡を残す。受部と脚部の接合は、脚部上端の外側に受部を接合する方法による。径の大きい方を受部としたが、接合方法と内面の調整の違いにより判断した。なおこの種の器台は米田敏幸氏による布留系の器台とされるものである。4は短頸壺で、口径約12.7cm、器高22.5cmを計る。下膨れの長い体部から、口頭部がわずかに屈曲して開く。粗製で、器面全体に凹凸や歪みが著しい。径の小さな平底が付くが、極めて安定が悪い。調整は、底部付近に縦方向のミガキが施される他は、体部から口頭部にかけて、ナデ、もしくは板状工具による粗い調整が施される。内面にはナデに伴う指頭痕が顕著にみられる。

**落ち込み1 (第11図1~4)** 1は壺の口縁部である。10分の1程度を残すに過ぎず、口径は推定による。口縁端部は若干内側に肥厚する。体部との境界の少し下からケズリが施される。2は二重口縁の壺で、残存最大径19.6cmを計る。大きく外反する頸部から口縁部が斜め上方に立ち上がる。頸部の下端に断面三角形の突帯をめぐらす他、頸部と口縁部との境界に粘土を付加することにより、わずかに垂下させる。風化のため調整は明らかでないが、頸部内面の一部にミガキの痕跡が認められる。3は高杯の杯部である。口径14.8cm、残存高9.4cmを計る。丸い椀状を呈し、外面はケズリおよびナデ、内面はナデの後やや粗いミガキが施される。4は丸い椀状の鉢である。口径約11.4cm、器高11.4cmを計る。全体に風化が著しく判然としないが、上端部が内傾面をなし、口縁部を形成するものと推定される。内外面の調整は不明。

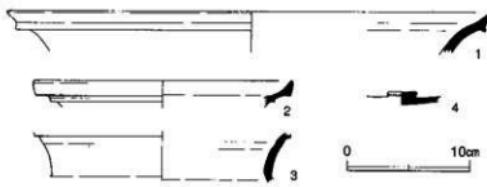
**包含層 (第12図1~4)** 第1面と第2面の中間層から出土したものである。1~4はいず



第11図 落ち込み1出土遺物 (1:4)

れも須恵器であるが、時期的に相当の幅がある。1は壺の口縁部で、口径約39.6cmを計る。口縁端部は丸く、その直下に断面三角形のシャープな突帯を一条めぐらす。内外面ともに非常に丁寧な回転ナデ調整を施す。胎土は緻密で、内外面ともに灰色、断面はにぶい橙色を呈する。2も壺の口縁部で、口径21.2cm。口縁端部は外方に膨らみをもった断面三角形状を呈し、その直下に一条のシャープな突帯をめぐらす。胎土は緻密で、灰色の色調を呈する。3は壺の頸部である。頸部上端にシャープな突帯をめぐらす。おそらく3の下にはこれと同様な頸部が付く

### 3. まとめ



第12図 包含層出土遺物 (1 : 4)

～3は須恵器でも初期の段階のもので、1が陶邑古窯社群におけるTK73、2・3はTK208型式に並行するものと考えられる。4は平安時代に比定されよう。

### 3. まとめ

今回の調査では、面積が限られていたとはいえ、多くの成果を収めることができた。その主なものを列挙するとなると以下のようになろう。

- ① 鎌倉から室町時代にかけての集落や地割りに関する資料を得た。小曾根周辺の中世村落の状況はまだ未だ未知の部分が多い。規模の如何に関わらず、調査成果を総合的にまとめて、上記の課題を解決していく必要があろう。
- ② 鎌倉時代終わりころの良好な瓦器が出土した。
- ③ 古墳時代初頭の良好な土器資料を得た。とくに土坑1から出土した土器は、土師器の中でも最も古い段階に位置づけられるものである。西摂津における古墳時代前期の土器編年を組み立てて行く上で重要な資料となろう。

#### 注

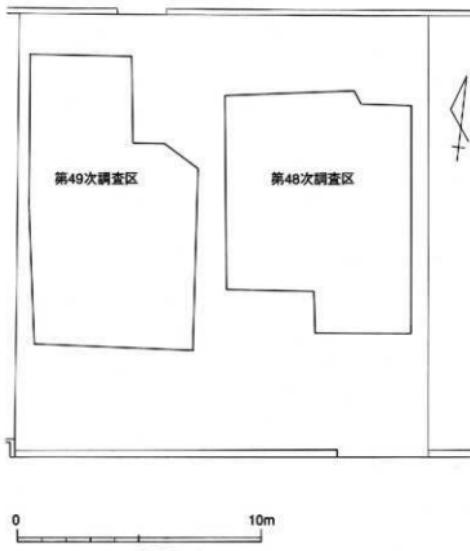
- (1) 清水 篓 「小曾根遺跡第18次」『豊中市埋蔵文化財年報』VOL. 5 1998年 豊中市教育委員会

ものと思われる。内外面はともに灰色、断面は赤灰色を呈する。4は杯の蓋である。上面がやや窪んだ円盤状のつまみを付する。色調は1～3と異なり、灰白色を呈する。以上のうち、1

## 第三章 新免遺跡第48・49次調査

### 1. 調査の経緯

第48次・第49次調査区は、本来同一敷地であったが、2筆に分割し、各敷地で別の個人住宅が建設されることになった。まず前者にかかる埋蔵文化財発掘の届け出が平成9年11月20日に提出され、これを受け試掘を行い、地表下80cmのところで遺構および遺物包含層を確認した。協議の結果、平成10年3月2日から3月20日にかけて調査を行うこととなった。また後者についても、平成10年3月2日に提出された埋蔵文化財発掘の届け出を受け、第48次調査の結果をふまえて平成10年6月1日から6月30日にかけて調査を行った。

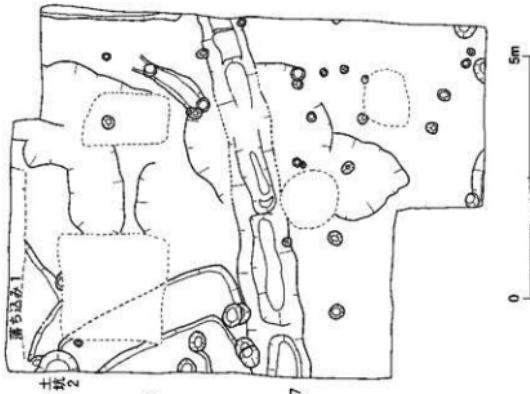


第13図 調査範囲図（1：200）

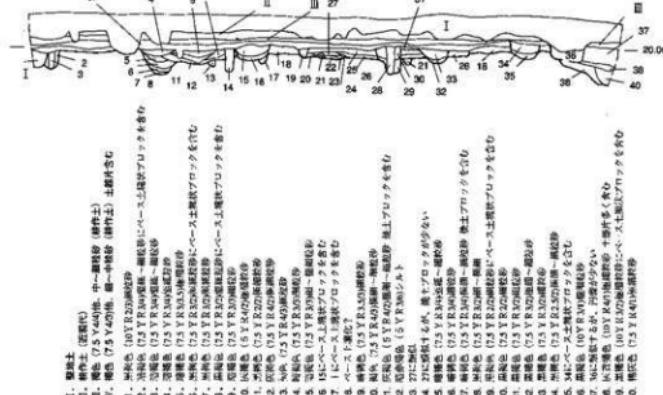
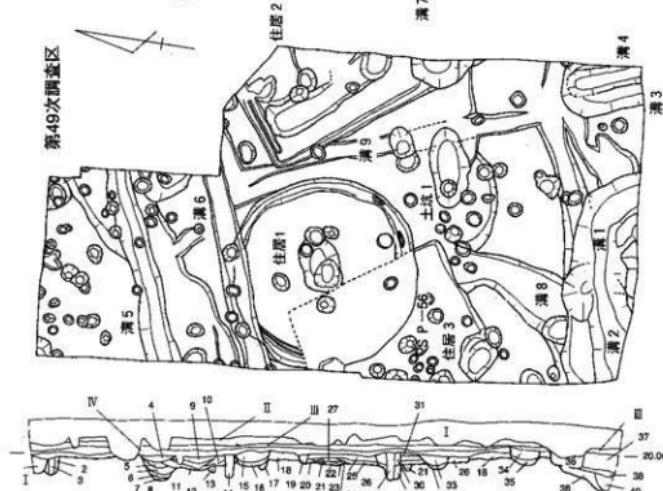


第14図 調査地位置図（1：5000）

第48次調査区



第49次調査区



第15図 調査区平面・断面図 (1:100)

## 2. 調査の成果

### (1) 基本層序

当調査区は、豊中台地西端の段丘崖から約50mほどなれた平坦部に位置する。周辺は一見して平坦であるが、子細みると緩やかに段丘崖へと傾斜する地形を呈している。一方、台地周辺は、中世以降の開発により著しい削平をうける場合が少くないが、当調査区では宅地造成に伴う盛り土以下、旧耕作土、中近世の耕作土が整然と堆積しており、大規模な開発による影響は見出しつかない。また耕作土の直下には、暗褐色または黒褐色細粒砂の堆積が見られるが、これらは各時代の遺構埋土の堆積により形成されていることから、明確な遺物包含層といえる堆積層は認められない。

以上より、当調査区における基本層序の構成は、宅地に伴う盛り土、耕作土、段丘堆積層となる明黄褐色細粒砂層に大別できる。なお、中近世の耕作土には数時期にわたる耕作面の存在が予想されたが、ここでは大別2層に区分した。

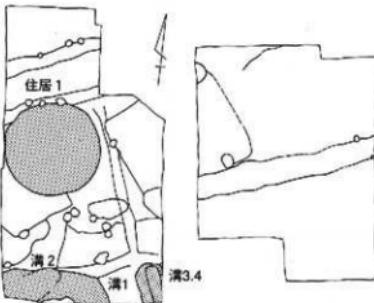
### (2) 弥生時代の遺構と出土遺物

**住居1** 第49次調査区中央で検出した円形の住居である。直径3.8m、深さ30cm前後をはかり、小型の部類に属する。

住居の中央には平面梢円形の炉を検出した。炉は主軸長1.2m、幅0.8m、深さ20~30cmをはかる。炉の底面は西部で段落ちとなることから、再掘削された可能性が考えられる。なお、炉の直上から壺・甕の大型破片が出土した。

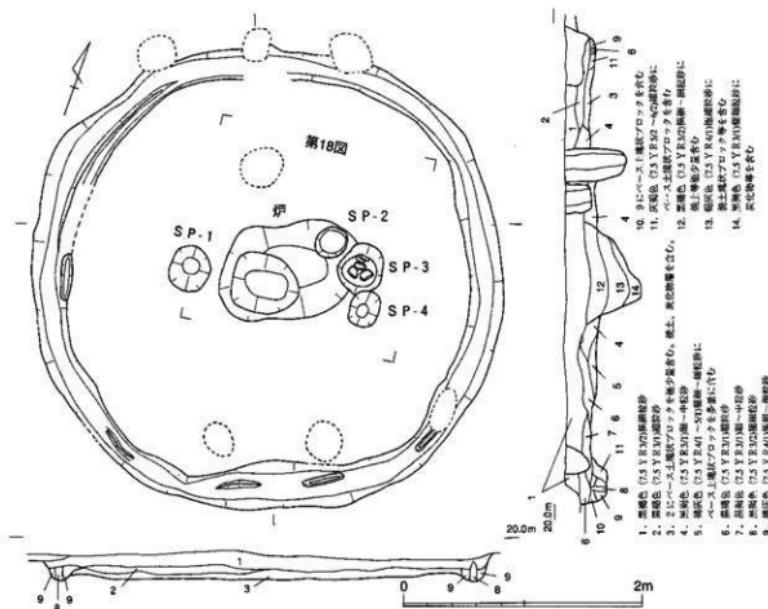
炉の東西から、住居の主柱穴と考えられる柱穴を計4基ほど検出している。柱穴は、いずれも直径25cm前後、深さ40cm前後をはかる。このうち、SP-3の基底部からは根石と考えられる15cm前後の石が数個配置された状況で検出されており、主柱穴となる可能性が考えられる。ただ、東側の柱穴は3基ほどあり、いずれの柱穴が西側のSP-1と対応するかは明確ではない。なお、炉の周囲にかけて土器が若干出土している。

住居の周囲には、幅20cm前後、深さ4~10cm前後の壁溝が巡らされている。壁溝は住居北部から西部にかけて重複しており、住居がやや拡張気味に建て直された可能性が考えられる。また、壁溝基底部

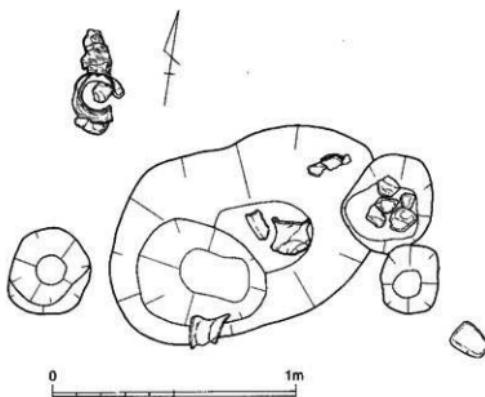


第16図 弥生時代の主要な遺構

2. 調査の成果



第17図 住居1平面・断面図 (1:40)



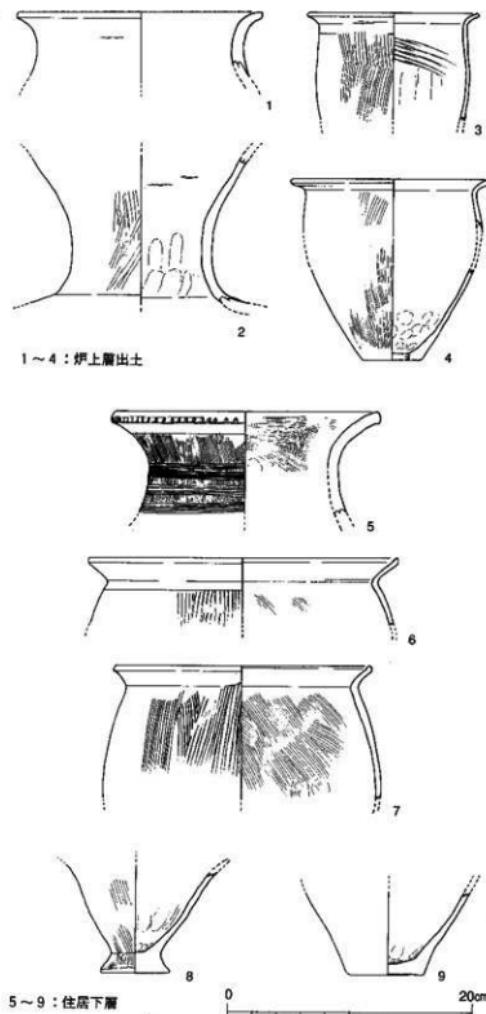
第18図 住居1 炉周辺土器出土状況 (1:20)

には部分的に幅2~3cm、長さ20cm前後、深さ2~5cmの窪みが認められる。窪みは平面長方形を呈しており、壁板小口部分の痕跡とも想定でき注目される。

住居内の埋土は大別3層に区分できる。このうち、下層はベースとなる黄褐色シルトロックを多量にふくむ層厚2~5cmほどの整地層となる。また、上層と中層の層境には多量の炭化物が堆積する。中層埋土は主に暗褐色細粒砂からな

り、整地層とは考えにくいが、炉は中層上面から埋設する状況が断面から確認でき、また層境の炭化物が家屋廃絶後の堆積となる可能性が考えられることから、住居機能時の堆積となる可能性が想定できる。

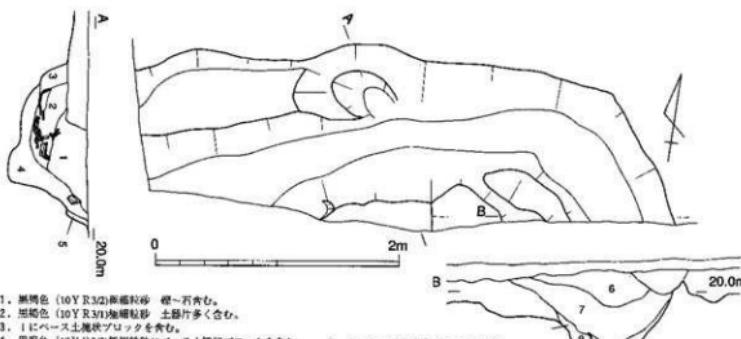
出土した遺物のうち、第19図1～4は炉内埋土上層から、また5～9は炉の周囲から出土したものである。1は短頸壺の口縁部で、口径の復元値は19.8cmを計る。器壁は著しく摩耗しているため、調整は明確ではないが頭部にハケの痕跡が残る。2は長頸壺の頸部である。口縁は欠損しているため口径は不明であるが、頭部径は11.4cmをはかる。頭部外面には縦方向のヘラ磨きを施す。内面は風化が著しく調整は明確ではないが、一部にナデの痕跡が認められる。3・4は壺で、いずれも口径が体部径をこえる器形となる。4は残存する口縁などから口径16.0cm、器高16.0cm前後に復元でき、小型の壺になる。体部外面にハケ調整を行った後、口縁部にかけてナデを施す。3は残存する口縁から口径13.6cmのやや小型の壺に復元できる。体部外面にハケを、口縁にはナデを施す。5は広口短頸壺の口頸部で、口径21.3cmをはかる。口縁端部にはナデを施したあと端部下間に刻



第19図 住居1出土遺物 (1:4)

から口径13.6cmのやや小型の壺に復元できる。体部外面にハケを、口縁にはナデを施す。5は広口短頸壺の口頸部で、口径21.3cmをはかる。口縁端部にはナデを施したあと端部下間に刻

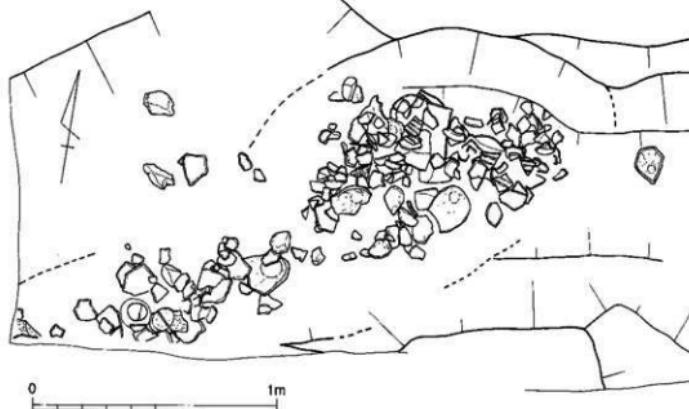
## 2. 調査の成果



第20図 溝1・2平面・断面図 (1:40)

み目を、また頸部には縦方向のハケを施したのち3条以上の直線文で加飾する。また、頸部内面には横方向のハケを施す。6・7は壺であるが、いずれも口径20cm前後に復元できる中型品で、体部外面には粗いハケが施されている。また、いずれの壺も体部径が口径をこえる器形になるものと考えられる。9は甕の底部である。底部径6.0cmをはかり、底部の厚さは1cm前後をはかる。体部下半は風化が著しく調整は不明である。8は小型鉢の底部である。底部は中実の脚状とも言うべき形態を呈する。口縁部は欠損しているため形状は明確ではないが、残存部から外反気味に屈曲する口縁部を有していた可能性が考えられる。

これらの遺物は大まかでⅢ様式後半の所産といえるが、甕の中にはやや古い特徴を残すもの



第21図 溝2土器出土状況 (1:20)

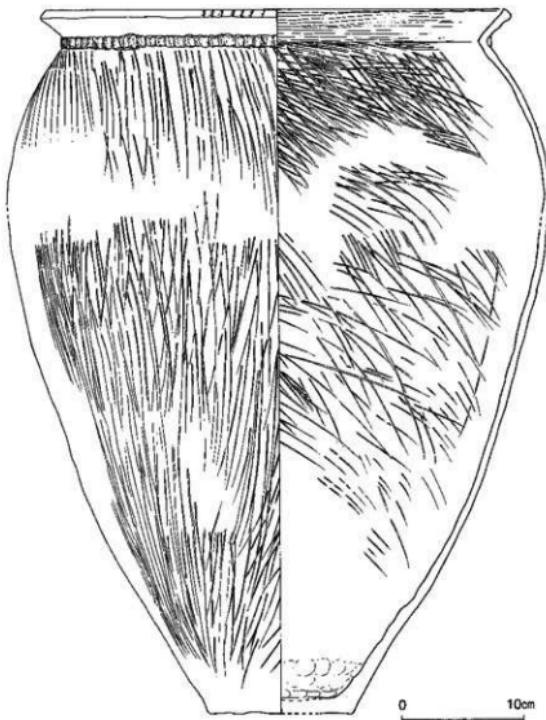
も見られるなど、Ⅲ様式前半に漸る可能性も残される。これらの土器は住居の廃絶後間もない時期に廃棄されたものと考えられ、住居の時期はⅢ様式後半以前と言える。

溝1 第49次調査区南西端で検出した直角に曲がる溝である。溝の南部および西側は調査区外にあり、全体の形状は明確ではない。

溝の幅は1.0m前後、深さは0.6m前後をはかる。溝内の埋土は大別3層に区分できるが、最下層を除くすべての層に黄褐色シルトの塊状ブロックが含まれていることから、溝は機能停止後に埋め戻された可能性が考えられる。なお、溝1東西部分の西側は溝2と重複しているため、平面形はあまり明確ではない。

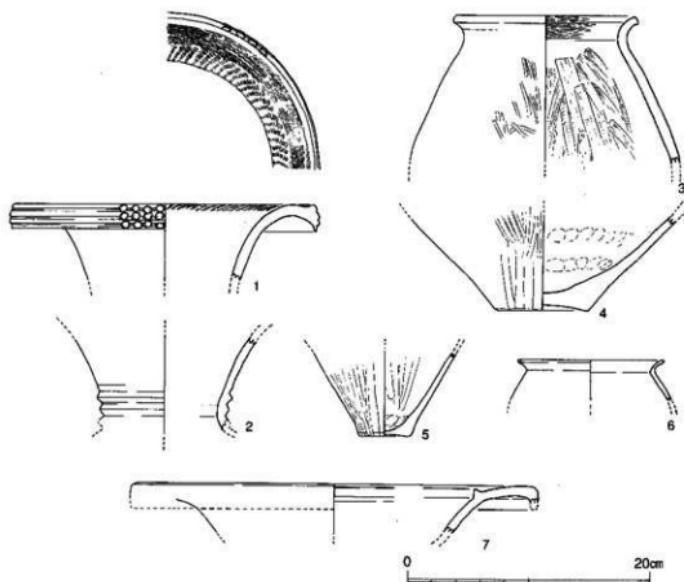
溝内中～下層にかけて、わずかではあるが土器の大型片が出土している。このうち図化できたものは、第24図4の長頸壺に限られる。4は口径9.6cmに復元でき、やや外反気味に立ち上がる頸部には4条の直線文が施される。

溝1は、出土遺物が限られ時期は明確にしにくいが、4を見る限りⅢ様式中頃になる可能性がある。一方、溝2は出土遺物からみてⅢ様式中頃には掘削されており、溝1下層との時期差はわずかであり、溝1の一部が埋没過程で再掘削されたか、または溝1埋没後に新たに溝2が掘削された可能性が考えられる。なお溝1は平面の形態からみて、方形周溝墓となる可能性も考えられるが、検出



第22図 溝2中層出土遺物1 (1:4)

## 2. 調査の成果



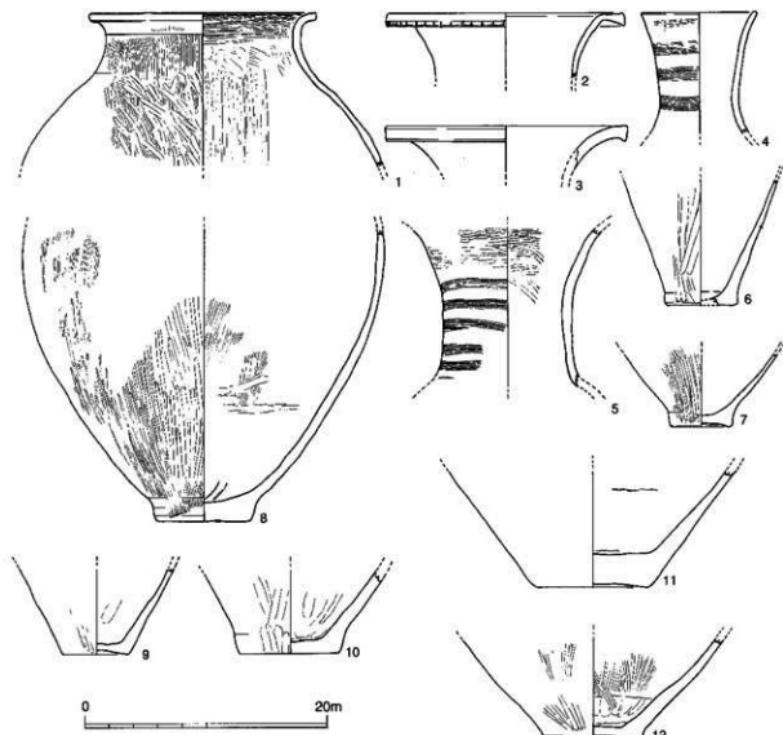
第23図 溝2中層出土遺物2 (1:4)

部分が限定されているため確定しにくい。

溝2 溝1と重複して検出した溝で、先に述べたように溝1の一部が埋没過程で再掘削された可能性も残る。溝の幅については古墳時代の溝と重複するため明確にはできなかったが、断面などから幅0.5m～0.7m、深さ0.5m前後と推定できる。

溝内の埋土は3層に大別できるが、このうち溝上層と中層の層境および下層から土器片が多い量に出土している。これら土器片の出土状況には個体としてのまとまりがみられず、また出土した土器片から完形に復元できたものは極めて少ないとから、それぞれの土器は破碎されたあと、溝に投棄されたものと考えられる。

出土遺物のうち、上層と中層の層境から出土したものを第22図・第23図に挙げた。第23図1は広口壺の口頭部で、口径25.6cmに復元できる。口縁端部は粘土帯を付加して拡張し、側面に3条の凹線を施した上で、それぞれの凹線上に4つずつ円形浮文を貼り付けている。また、口縁上には幅1.8cm程度の単位で細かい波状文を、またその内側に列点文を施している。なお、頭部内外面は風化が著しく調整等は不明である。2は壺の頭部である。体部との境界付近に少なくとも3条の凸帶が貼り付けられる。凸帶は、断面三角形で幅1.0cm前後、高さ0.6cm前後をはかる。3は短頸壺で、口径14.6cmに復元できる。短く外反する口頭部の内面にはヘラミガキが施

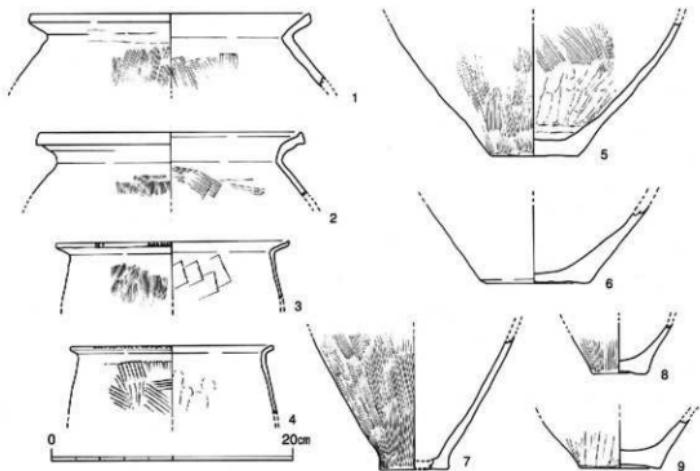


第24図 溝2下層出土遺物1 (1:4) (4:溝1中層出土)

される。体部外面にはヘラミガキを、内面には板状工具によるナデを施す。4・5は壺の底部と考えられるが、体部以上がなく器種は特定できない。なお、4の底部径は7.8cmに復元でき、5の底部径は4.2cmをはかる。いずれも体部外面にやや幅のある工具でヘラミガキを施している。6は壺で口径11.9cmに復元でき、体部径が口径を上回る。7は高杯杯部である。口縁は一部が残存するだけで、口径の復元には問題を残すものの、現存部分からは約32cmに復元できる。口縁端部は下方へ垂下し、口縁と体部の境には断面三角形状の粘土帯を付加する。第22図の大型壺は体部上半が全周しないものの、器高58.5cm、口径38.6cmに復元できる。口縁端部はナデにより端面をつくり一部に刻み目を加え、頸部には粘土帯を貼り付け、押圧による加飾を施す。体部内外面は極めて粗いハケを施す。

上層から中層にかけて出土した遺物のうち、壺・高杯にIV様式前半(IV-1~2様式)の特

## 2. 調査の成果



第25図 溝2下層出土遺物2 (1 : 4)

微を有するものがみられる。しかし、遺物全体を見たとき、凹線文を施すものが少ない傾向が見られることは注意されよう。

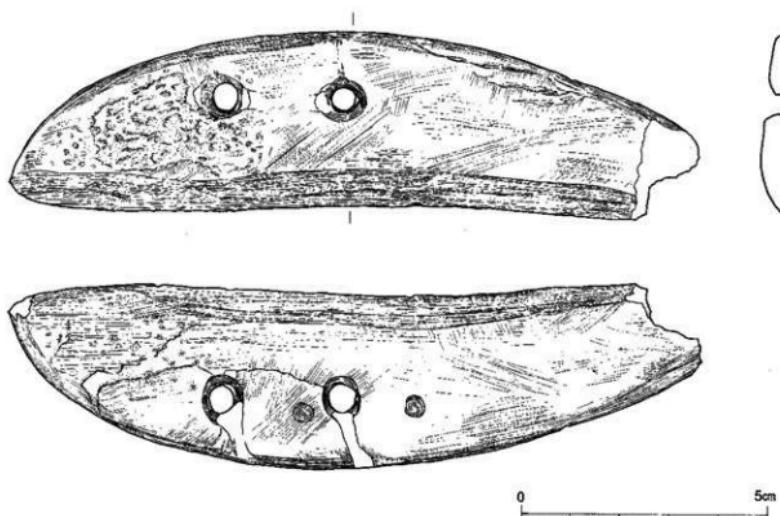
下層から出土した遺物を第24・25・28図に挙げた。第24図1は無文の広口壺で、口径19.8cmをはかる。8と同一個体となる可能性が残る。口縁内面および体部外面にヘラミガキを施すが、粗雑で装飾性に乏しい。2は広口壺の口縁で、口径19.4cm前後に復元できる。口縁端部は拡張され、下端に刻み目による加飾を施す。口縁内外面はナデを施すが、頸部内外面の調整は風化が著しいため明確ではない。3は広口壺の口縁で、口径19.4cmに復元できる。口縁端部はナデによりやや拡張気味に側面を形成するが、加飾はない。5は長頸壺の頸部で、口縁および体部は欠損している。頸部中位から体部にかけて、少なくとも5条の櫛描直線文が施される。底部のうち、6を除いては残存部分が少なく、発になる可能性も残る。



第26図 溝2下層石斧出土状況



第27図 溝2下層石包丁出土状況



第28図 溝2下層出土遺物3（1:1）

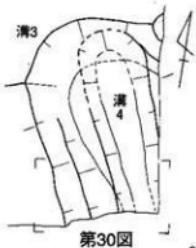
第25図1～4は壺である。1は口径23.2cmに、2は口径21.6cmに、3は口径19.0cmに、4は口径16.8cmに復元できる。3・4は短く屈曲する口縁の端部に刻み目を施す。口縁内外面の調整はナデである。3の体部内面は板状工具により横方向のナデを施している。2は体部径が口径を上回り、体部上半に張りがある器形が予想できる。また、口縁部は肥厚し、端部はナデにより上下にやや拡張され、面を形成している。なお、底部については残存部分が少ないと、壺などの器種になる可能性も残る。

第28図は磨製の石包丁で、直線片刃で半月形を呈する。残存部で刃渡り14cmをはかる。紐孔は両面穿孔であるが、背面に未貫通の穿孔痕を有する。また、背面の紐孔周囲は摩耗が著しく、刃部も刃潰れがある。なお、溝2からは第28図のほか石鎌や船刃石斧、石包丁片などの石製品が若干出土している。

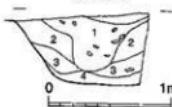
下層出土遺物は、全体的に装饰性に富む遺物が少なく時期は決定し難しいものの、凹線文を施すものがないことからほぼⅢ様式後半頃と考えられる。

以上より、溝2はⅢ様式後半頃に削削されⅣ様式前半にはほぼ埋没していることから、溝が比較的長い期間開口していたことが伺われる。また、溝2は多量の土器が出土するなど、溝1と同様に特異な性格が想定できるかもしれないが、遺構の一部分を検出しただけにとどまるところから、その性格について明確にはできなかった。

溝3 第49次調査区南東隅から検出した溝である。溝は調査区南方へのびるため、全体の形



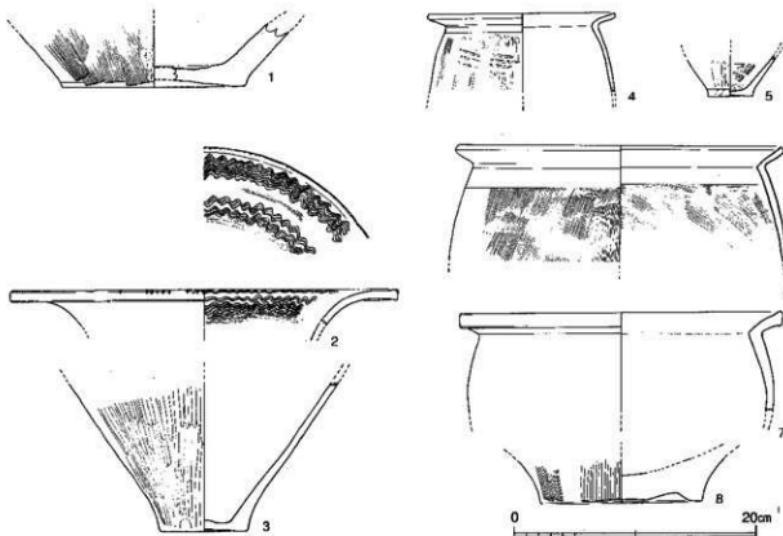
第29図



状については明確にできないが、検出部分における溝の幅は1.1m、深さ0.6mをはかる。溝内の埋土は、均質な黒褐色細粒砂または極細粒砂からなり、人為的な堆積状況は認められない。溝からは若干の遺物が出土したが状況にまとまりはなく、また図化できるものは第31図1の甕底部に限られた。1の底部径は復元値で15.2cmを、また底部の厚さは1.0cmをはかる。底部外面の調整はハケとなるが、内面は風化が著しく調整は不明である。1は、法量から大型の甕または壺になる可能性がある。なお、溝3は出土した遺物及び溝4との重複関係から、Ⅲ様式の遺構といえる。

溝4　溝3と重複して検出した溝である。溝3と同様に調査区外に伸びるため、全体の規模等については明確ではないが、検出部分における溝の幅は0.9m、深さ0.5mをはかる。溝内からはややまとまった量の遺物が出土しているが、層毎に区分できる状況ではなく、

上：第29図　溝3・4平面・断面図（1:40）  
下：第30図　溝4　土器出土状況（1:20）



第31図　溝3・4出土遺物1（1:4）　（1:溝3　2~8:溝4）

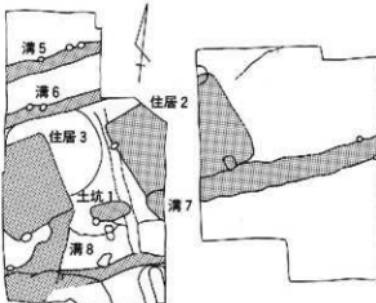
溝が開口している段階で一括投棄した可能性が考えられる。溝4から出土した遺物のうち、壺(2・3)・甕(4~7)・底部(8)が図化できた。2は広口壺の口縁部である。口径は復元値で32cmをはかり、中型の壺と考えられる。口縁端部は拡張されず、端部上端に刻み目を施す。また、外反する口縁部内面(見込み)は2条の波状文で加飾されている。溝4の中ではやや古い様相を示す遺物になる。3は壺の底部である。底部径は7.2cmをはかり、底部の厚さは1cm前後と厚い。底部外面はナデを、体部下半にはヘラミガキを施す。また底部内面は未調整で押圧痕がのこるが、体部内面は丁寧にナデあげている。4・6・7は甕の口縁である。4は口径15cmに復元できる小型の甕である。体部外面には左上がりのタタキ痕が認められる程度に、ハケが施されている。6は口径26cmに復元できる中型の甕で、体部径が口径をこえる。口縁内外面にはナデを、体部内外面にはハケ調整を施す。7は口径26cmに復元できる中型の甕である。口縁は肥厚し、口縁端部はナデを施し、わずかに拡張されている。体部内外面は風化により、調整は不明である。5・8は底部である。5は底部径5.6cmに復元でき、小型の甕になる。8は底部径13.4cmをはかり、大型の甕になる可能性がある。溝4から出土した甕の中には、Ⅲ式様後半以降の特徴を有するものが含まれていることから、この頃に埋没したといえる。溝3との時期差は明確ではなく、その関係については不明である。また、溝1・2とはほぼ同時期の埋没になることは注意されよう。

### (3) 古墳時代の遺構と出土遺物

住居2 第48次調査区西部から第49次調査区東部にかけて検出した方形の住居である。住居中央付近は調査範囲外で、また住居東辺や南辺は擾乱や別の遺構によって破壊されているため、全体の構造については不明瞭な部分が多い。

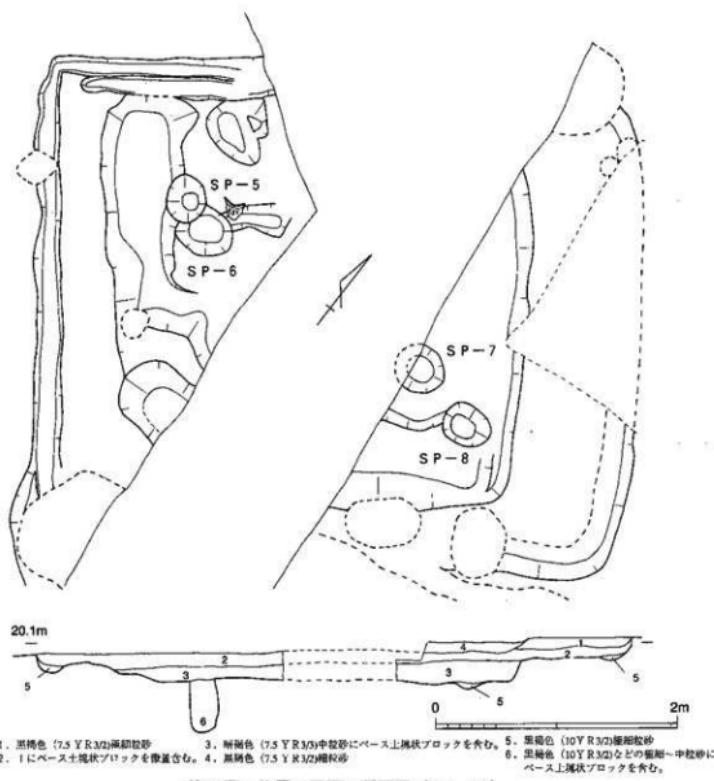
住居の主軸は略北東に傾く。住居は一辺4.2m~4.5mをはかり、面積にして約22m<sup>2</sup>となる。住居内には幅0.4m~1.0m、高さ15cmのベッドをベース切り出しによってつくられるが、北側の一部は盛り土でつくった可能性もある。なお、ベッドの内側にある部分は、埋め戻しによる堆積が認められ、堆積土からは製塙土器の細片が若干出土したほか、第34回の高杯部が出土している。

壁溝は幅20cm前後、深さ3cm前後と浅く、北辺では2条ほど検出されていることから、建て替え等に伴い拡張されたと言える。住居に伴う主柱穴は未調査部分もあって、確定にくいが、SP-5~8となる可能性が考えられる。



第32図 古墳時代の主要な遺構

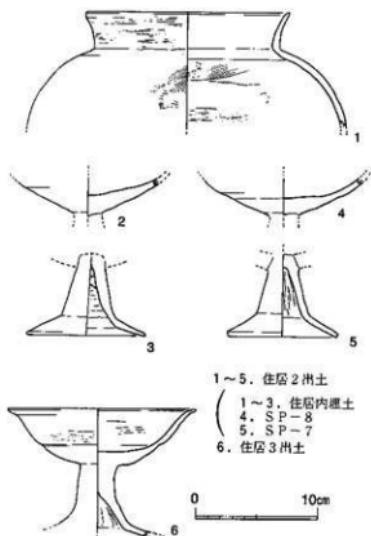
## 2. 調査の成果



第33図 住居2平面・断面図（1:40）

なお、カマドについては明瞭な痕跡等が認められなかったため、未調査部分に存在する可能性を指摘するだけに留める。

住居内からは、第34図1～5の遺物が出土している。このうち5はSP-7から、4はSP-8から、また2はベッド内の堆積土から出土したほかは、住居内の堆積土から出土した。1は口径16.4cmに復元できる壺である。口縁部はやや外反気味に立上がる形状となる。口縁内外面はナデを、体部外面にはハケを施す。体部内面は風化が著しく調整は明瞭ではないが、板状工具による調整の痕跡が辛うじて認められる。2・4は高杯の杯部であるが、いずれも脚部との接合には接合法が用いられている。3・5は高杯脚部である。3は裾部径9.8cm、脚部高5.6cmをはかる。脚部内面はヘラケズリを施し、接合部内面には棒状工具の差し込み痕が残る。5は裾部径8.8cm、脚部高5.5cmをはかる。脚部内面は未調整で、穿孔はない。これらの遺物は布留式以降の



第34図 住居2・3出土遺物 (1:4)

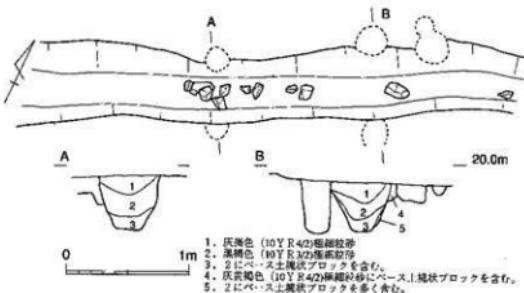


第35図 土坑1平面・断面図 (1:20)

様相を有しており、住居は古墳時代中期の所産と考えられる。

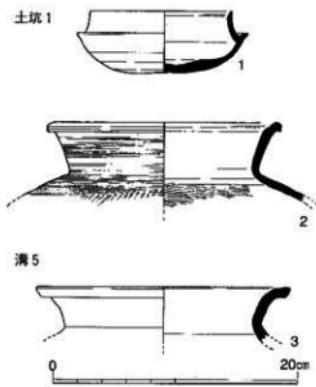
**住居3** 第49次調査区西側で検出した堅穴住居である。住居東側の半分は住居1と重複し、また西側は調査区外に広がるため、全体の状況はとらえにくかった。ただ、検出部分およびカマドの位置から、平面長方形に近い形態を呈する住居で、その規模は長辺で3.5m、短辺で2.7m前後に推定できる。

住居北辺のほぼ中央において、北辺に直交して作りつけられたカマドが検出された。カマドは東側の袖部と燃焼部の一部が検出されただけにとどまり、煙道や焚口、また規模等の詳細については明確ではない。カマドの袖部は、焼土の塊状ブロックや炭等が多く含む緻密な粘質土で構築されるが、内壁は被熱による



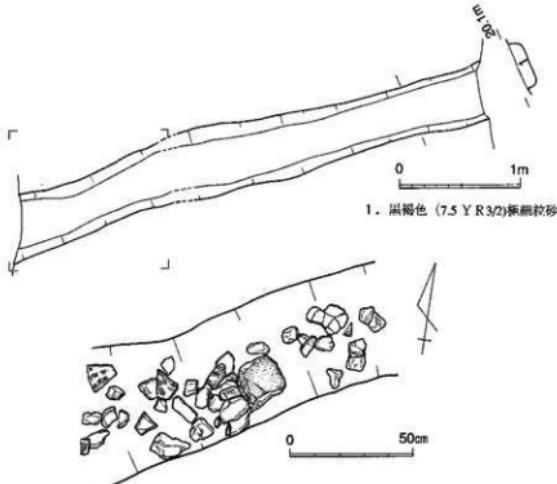
第36図 溝5平面・断面図 (1:40)

## 2. 調査の成果



第37図 土坑1・溝5出土遺物（1：4）明確ではない。高杯は布留式後半の様相を示す。

土坑1 第49次調査区溝7の西側で検出した土坑である。平面楕円形を呈し、主軸長1.65m、幅0.8m、深さ0.24mをはかる。埋土のうち、下層はベースの塊状ブロックを含み、堆積の状況は溝7に類似する。土坑の位置は溝7の延長上にあり、また出土した須恵器も溝7と同時期のものであることから、関連性が注目される。土坑1中層からは第37図1・2が出土している。



第38図 溝6平面・断面図（1：40, 1：20）

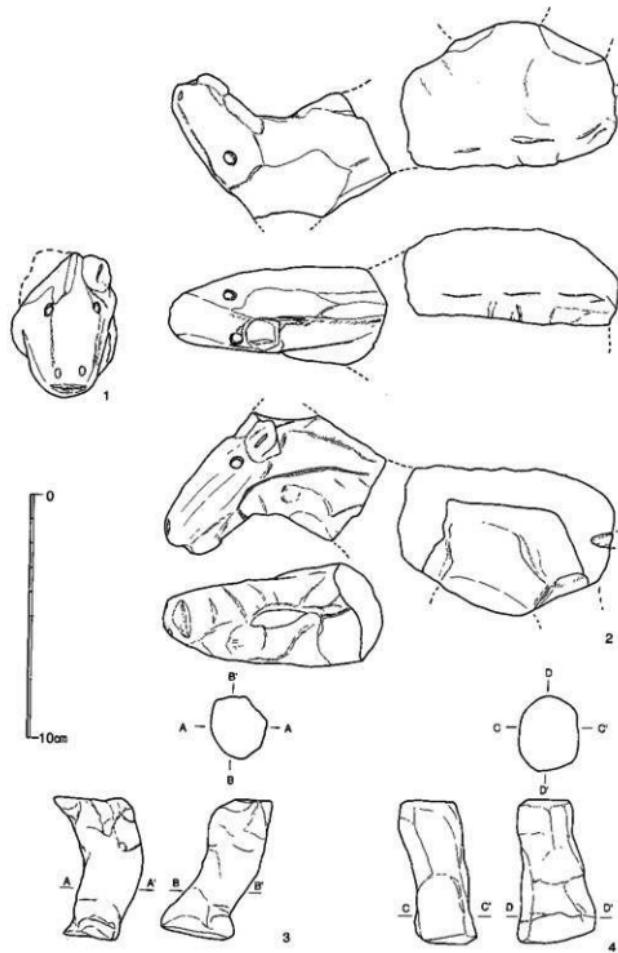
明瞭な変色はなかった。燃焼部には均質なシルトを敷き詰めているが、焼きしまるほどの熱を受けていないことから、カマドの機能した期間は短期であったものと考えられる。

また、住居内からは多数の柱穴が検出されたが、住居の主柱穴と考えられるものは特定できず、住居内に主柱穴がない可能性も少なからず残されている。なお、住居内から第34図6の高杯が出土した。6は杯部径15.2cmをはかる。杯部内外面にはヘラミガキが施され、口縁部上面にはナデにより凹線状の沈線が1条ほど巡る。脚部と杯部の接合には、接合法が用いられる。脚部は中実で、内面にはハケが施されているが、外表面は風化が著しく調整は

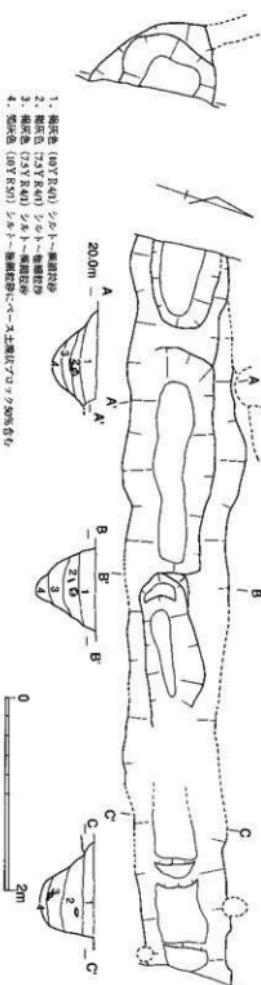
1は、須恵器杯身で、口径11.6cm、器高5.2cmをはかる。底部は丸味を帯び、口縁端部には明瞭な沈線が巡らされるが、底部の回転ヘラケズリなどは粗雑である。2の甕は、口径19.1cmに復元できる。頸部から体部にかけてはカキメを施す。また、口縁端部には沈線を1条ほど巡らす。1はTK47

併行と考えられ、6世紀初頭の所産となる。

溝5 第49次調査区北部で検出された東西にのびる溝である。幅0.45m前後、深さ0.45mをはかり、溝の断面形は逆台形状を呈する。溝内の埋土は大別3層に区分されるが、いずれもベースの塊状ブロックを含み、流水を思わせる堆積層は認められない。区画または雨水処理の目的



第39図 溝6出土土馬（1：4）



第40図 溝7平面・断面図  
(1 : 50)

胸部（2）は胸部から以下の部分のうち左側のみ残存する。胸部は中空の構造で、背面上には後輪などの馬具を貼り付けた痕跡の可能性があるくぼみが2か所ほどみられ、上半には背筋に

で掘削された可能性が考えられる。また、中層と下層の層境は10~20cmの石が多数投棄された状態で出土しているが、石のなかには刃部と基部が破損した蛤刀石斧も含まれていた。溝5上層付近から第37図3の須恵器壺口縁が出土しているが、そのほか化できる遺物はなく、時期は特定しにくい。

溝6 溝5から1.8m南のところで検出した溝である。溝の幅0.45m、深さ0.15mをはかり、溝5と同様に東西に伸びる。溝内からは、10~20cmの石に混ざり土師器・須恵器・カマドなどの大型片が出土した。また重機掘削時に遺構上面からは、カマドや土馬が出土している。化された遺物は、重機掘削時に出土した土馬（第39図）に限られる。

土馬は頭部（1）、胴部（2）、脚部（3・4）に分断されているため、確実な全長や高さは明確にはできないが、残存部分から少なくとも全長19cm以上、高さ13cmくらいになる可能性が考えられる。土馬の胴部と脚部は貼り付けにより接合しているが、接合と調整の前後関係は不明である。また、頭部との接合については、接合部が欠損しているため明確ではない。以下、各部について述べることにする。

頭部（1）はほぼ完形に近い状態であったが、左側面は掘削時に削平されている。頭部は中実の構造で、目、耳、口、鼻、タテガミ、手綱？の表現がなされる。目は半裁竹管状の工具でくり抜くように、また耳は三角形状の粘土塊を貼り付け、これの前方に串状の工具を刺して、鼻も串状の工具で刺して、口は本体に上下2方向から切り込みを入れ表現する。タテガミは、ほとんど残存していないが、成形時に粘土をつまみあげて作ったものと考えられる。馬具に関する表現として明確なものはなかったが、頭部から頭部にかけての側面に線刻が認められ、手綱の部分が線刻によって表現された可能性が考えられるが、前後の馬具の痕跡は見られなかった。なお、喉の部分には長さ2cm、幅7mm前後、深さ4mm前後のくぼみが認められる。

そつて尻繁に伴う革帶を表現した可能性がある線刻が見られる。

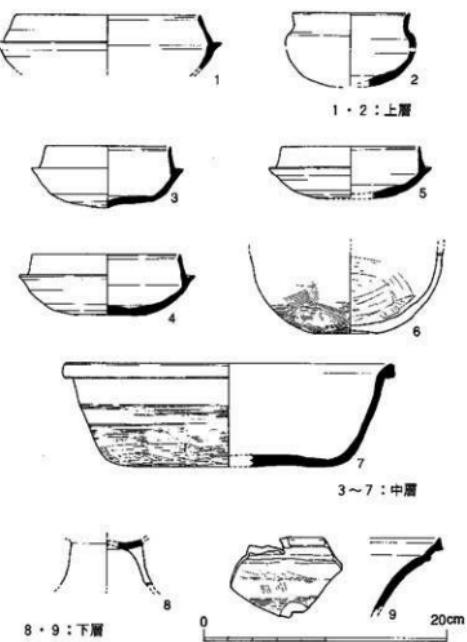
脚部はあわせて3脚が残存するが、このうち2脚(3・4)を掲載している。3・4は手捏ねで成形し、調整などは施さない。胴部との接合面は平坦である。なお、いずれの脚が前後に対応するかは明確にできなかった。

溝6はこのほかに出土した遺物からも、古墳時代後期の所産になる可能性が高い。なお、土馬については本町・新免遺跡の調査である程度出土しているが、今回のように頭部から脚部にいたる部位が揃って出土した事例ではなく、当遺跡においては稀少な遺物といえる。

溝7 第48次調査区中央から第49次調査区東部にかけて検出した、東西方向にのびる溝である。溝はさらに調査区の東へと伸びるようであるが、西側は第49次調査区で途絶し、その延長は見られなくなる。

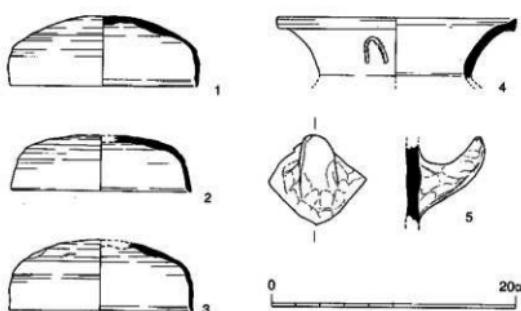
溝の幅は0.9m前後、深さ0.3mをはかる。溝底面は、さらに長さ2~4m、深さ0.2~0.3mの土坑状の落ち込みが連結した状態で検出されているが、この部分にはベースの塊状ブロックを多量に含む黒褐色細粒砂が堆積していた。おそらく、溝は何等かの理由により掘削途中で一部を埋め戻して、機能を果たしたものと想定できる。また、溝底面で検出した土坑状の落ち込みは、溝の掘削単位とも考えられ、溝掘削の過程を知るうえでも注目されよう。

なお、溝7からは、第41図に挙げる遺物が出土している。また、1・2は上層から、8・9は下層から、他は中層から出土した。このうち6と7はまとまった状態で出土している。1は須恵器杯身で、口径15cm程度に復元できた。各端部は丸味を帯び、口縁端部の沈線も不明瞭である。2は短頸壺で、口径9.2cmに復元できた。口縁部は、やや外反気味に立上がり、端部には沈線が巡らされる。体部内外面には丁寧なナデが施されるが、外面下半はヘラケズリが認められる。3~5は須恵器杯身で、口径11cm前後、器高5cm前後をはかる。いずれも、底部は丸味



第41図 溝7出土遺物 (1:4)

## 2. 調査の成果



第42図 溝8出土遺物 (1:4)

下半から底部はハケを施すが、体部の調整は明確ではない。7は大型の鉢で、口径27.0cmに復元できる。口縁部は折り曲げられ断面玉縁状に近い形状を呈する。底部は平坦で、全体的に洗面器に似た形状である。口縁から体部上半はナデ、体部にはカキメを、体部下半から底部には不定方向のヘラケズリを施す。8は高杯脚部の一部であるが、残存部が少なく全容は明確ではないが、3方向の穿孔が予想できる。9は壺の口縁であるが、残存部が少なく口径は復元できなかった。口縁端部は、ナデにより面をつくり、下部に断面三角状の凸帯を有する。溝7は、中層出土遺物がTK47併行に、上層がMT15併行に比定できることから、6世紀前半に埋没したものと考えられる。

溝8 第49次調査区南西部で検出した落ち込み状の溝である。溝の上面は削平され、また南側は弥生時代の溝1・2と重複しているため、平面などの形態は明瞭ではない。ただし、断面をみるとかぎり溝は南側へ次第に深くなり、これにともない遺物の出土量が増加する状況が観察できた。調査区南壁付近から、第42図にあげる遺物などが出土している。1~3は須恵器杯壺で、受部径15.0cm前後をはかるが、1は焼け歪んでおり、径の復元に問題を残している。いずれも天井部の継はあまく、端部の沈線も退行している。4は壺の口縁部である。口径は19.6cmに復元される。口縁端部は上下に拡張され、頸部にはヘラ焼きの記号文が認められる。5は把手であるが、どの器種に伴うかは不明である。全長5.0cm、幅3.0cmをはかる。溝8は出土した遺物は若干時期幅をもつ可能性があるものの、多くはMT15併行に比定されることから、6世紀前半から中頃の所産といえる。

### (4) 奈良時代の遺構と出土遺物

土坑2 第48次調査区北西部で検出した土坑である。土坑2の西側は調査区外へ伸びるため、平面形は確定できないが、検出部分から直径0.6m程度の平面円形を呈する土坑になると推定できる。土坑は形態からみて井戸になる可能性もあるが、深さが0.5mと浅いことや、下層に堆積

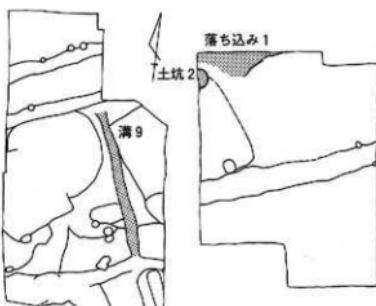
を帶び、口縁端部は比較的鋭く作られているが、全体的に粗雑である。6は、溝の西端で出土した土師器小型壺である。壺は体部下半から底部にかけて残存している。底部は平底を呈し、体部から明確に区別できる。底部径は4.2cmをはかる。体部

層が見られないことから、性格は不明である。

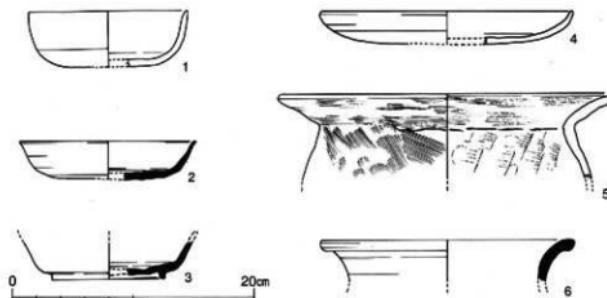
なお、土坑上層から第44図1の土師器皿が出土している。1は口径13.2cm、器高2.7cmを有する。体部にはナデ、底部は未調整で押圧痕を残す。内面には暗文ではなく、在地系の杯と考えられるが、調整は比較的丁寧で、胎土も都城系を模倣したものに類似する。

溝9 第49次調査区で検出した南北にのびる溝である。幅0.3~0.4m、深さ3~5cmを有する。一見して耕作にともなう溝となる可能性も考えられるが、調査区一帯に同様の溝はなく、性格は明確にはできなかった。溝からは、第44図2・3が出土している。2は口径15.0cm、器高3.6cmに復元できる。底部はヘラ切りしたあと、部分的にヘラケズリを施す。3は高台径9.6cmを有する。底部はヘラ削りを施す。高台は、底部から1cmほど内側に貼り付けられる。これらの遺物から、溝9は8世紀中頃の遺構といえる。

落ち込み1 第48次調査区北部で検出した。大部分は調査区外にあるため、地形に伴うものか判断しにくいが、溝9と直交することから溝の一部となる可能性も残されている。なお、落ち込み1の深さは最深部で0.2mである。落ち込みからは第44図4~6が出土している。4は土師器皿で、口径21.0cm、器高2.8cmに復元できる。底部付近は風化が著しく調整は明確ではない。内面見込みに、暗文は施されていない。土坑2から出土した第44図1とは胎土などが異なり、

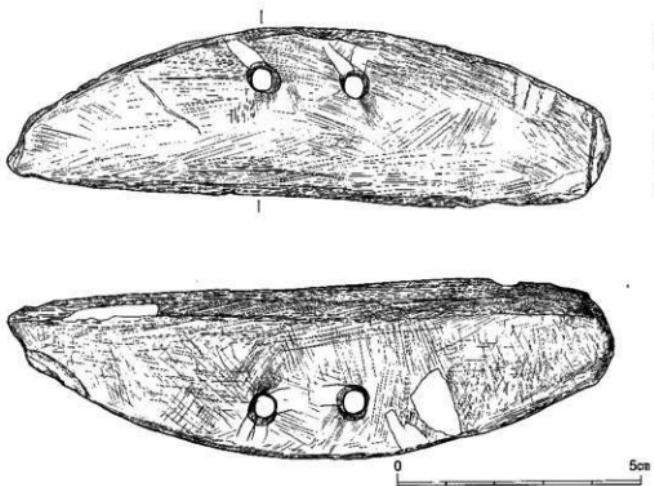


第43図 奈良時代の主要な遺構



第44図 土坑2・溝9・落ち込み1出土遺物1 (1:4)

### 3.まとめ



第45図 SP-56 出土石包丁 (1:1)

器壁も厚目でむしろ平城京Iに併行する特徴を有する螢池北第8次調査土坑1・2から出土した杯Aに類似する。5は長朋甕口縁で、口径28.0cmをはかる。口縁外面はナデ、内面は横方向のハケを施す。6は須恵器甕の口縁で、口径21.0cmをはかる。罐部はやや肥厚気味で丸味を帯びる。落ち込み1から出土した遺物から、時期を確定することは極めて難しいが、8世紀後半に下る可能性は少ないと考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では概要でも述べたように、各時期にわたる造構が濃密な状態で検出された。このうち、多数検出された柱穴については、調査区が限定されたこともあって建物または住居へ復元できず報告に活かせなかったが、これらの多くは弥生時代の所産となる可能性が高いこと、またSP-56の付近からはほぼ完形の石包丁(第45図)が出土していることを付記したい。

石包丁は刃渡り12.5cmをはかり、直線片刃で半月形を呈する。紐孔は両面から穿孔される。刃部の一方は破損したとともに、破損面のうち刃面側をさらに研いで使用したようである。

なお、当調査区周辺は、今回の調査のみならず既往の調査や試掘調査からも、各時期の集落関連造構が濃密に分布していることは明らかであり、周辺の開発および建築等についてはより慎重な計画を期す必要があろう。

## 第IV章 蛍池北遺跡第22次調査の成果

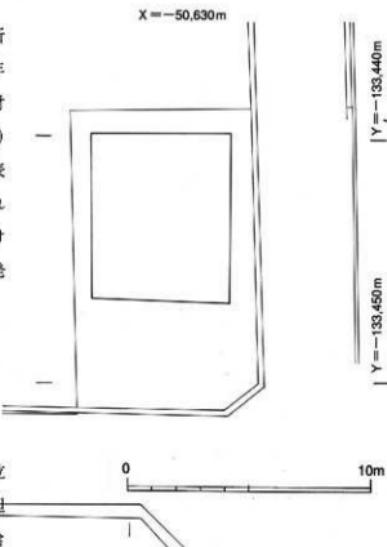
### 1. 調査の経緯

当調査区は豊中市螢池北町3丁目86-6に所在する。個人住宅の建設に伴い、平成10年（1998年）3月17日に提出された埋蔵文化財発掘の届け出に基づき、平成10年（1998年）4月8日に試掘調査を実施したところ、地表下約10cmのところで遺構面を検出した。これに伴い協議を行った結果、遺構の損壊は避けられず、平成10年（1998年）4月16日から発掘調査を行うことになった。

### 2. 調査の成果

#### （1）基本層序

当調査区は、待兼山丘陵から派生する低位段丘上に位置する。段丘上はなだらかな平坦面となるため、丘陵や河川からの土砂の供給は受けにくく、また中世以降の耕地開発など



第46図 調査範囲図（1：200）



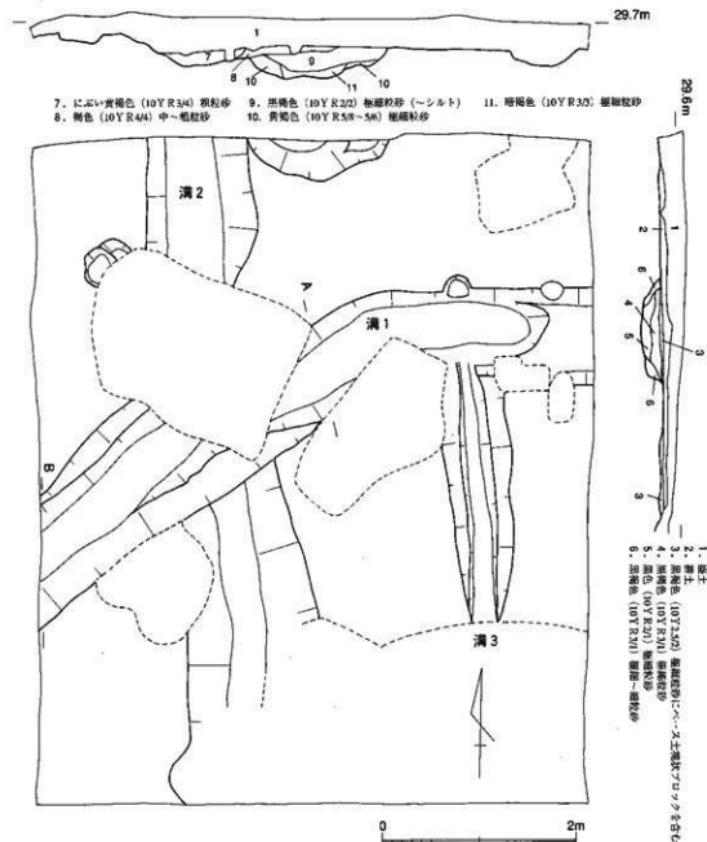
第47図 調査地点位置図（1：5000）

## 2. 調査の成果

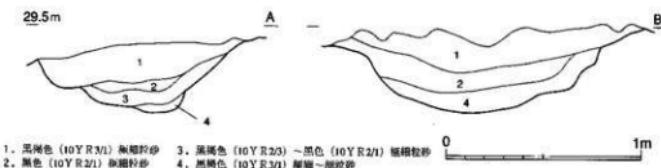
による削平を受けやすい環境にある。このような環境もあって、当遺跡においては集落跡などにともなう包含層、さらには遺構上面に及ぶ削平を受ける場合が少なくない。当調査区においてもその例にもれず、遺構は表土直下の段丘堆積層上面で検出した。

### (2) 検出した遺構

溝1 調査区北部で検出した。溝の上面は著しい削平を受けているため、本来の規模は推定しにくいが、現状で幅1.5m、深さ0.5mをはかることから、これ以上の規模になることは確実とい



第48図 調査区平面・断面図 (1:50)



第49図 溝1断面図 (1:50)

える。一方、溝内の埋土は3層に区分したが、いずれも黒色または黒褐色板細粒砂からなり、層境は不明瞭であった。よって、溝は掘削されたあと放置され、次第に埋没したと考えられる。

なお、溝1からはまとまった遺物が出土していないため、時期や性格については不明であるが、隣接する第5次調査・第10次調査の状況をふまえ、溝1の平面が弧を描きながら東西にのびる形状を考えあわせると、円墳の周溝となる可能性が想定できる。

この場合、溝1の円周から復元できる古墳の直径は約10mで、第5・10次調査で検出したものや、第13・17次調査のものと比較するとやや大きいものになる。ただ、検出部分が限定されていることから、今後溝の時期とあわせて検討の余地を残している。

溝2・3 南北にのびる溝で、溝2は幅1m、深さ0.15m前後、溝3は幅0.8m、深さ0.1m前後をはかる。溝2からは衛前焼き壙鉢の片が出土していることから、近世の所産となる。溝2は埋土やその規模から用水路と考えられ、溝3も類似する状況を呈することから耕作にともなう溝といえる。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳の周溝と考えられる溝および近世の用水路などを検出した。このうち、古墳の周溝と考えられる溝1の存在は、第5・10次調査区の成果とあわせて、付近一帯に円墳が密集する状況を明らかにするなど、重要な成果となった。

ところで螢池北遺跡では、これまでの調査で少なくとも5基以上の古墳を検出している。その内訳は、第5次調査の2基、第10次調査の1基とその可能性がある溝が1条、第13・17次調査の2基である。このうち、第5・10次調査区は遺跡西部に、また第13・17次調査区は東部にあり、古墳の分布は遺跡の東西に偏在している。また、遺跡の中央付近には小規模な谷地形が存在することや、遺跡中央付近における第1・4・7・9・14・16次調査で古墳らしき遺構が検出されていないことは、古墳の分布が東西2群に分けられる可能性を高める傍証になろう。

一方、これまで確認された古墳をみると、規模・形状がわかるものはすべて直径8m前後の円墳であり、周溝からわずかに須恵器片が出土するだけでその内容に大きな差はみられず、また時期がわかる古墳はいずれも古墳時代中期末（TK 23～47段階）を中心とするなど、共

### 3. まとめ

通する特徴が見出される。

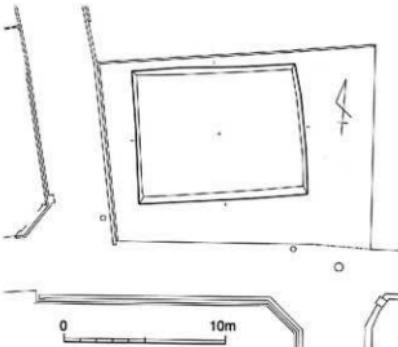
これらの知見をもとに、螢池北遺跡における古墳の展開を考えた場合、古墳時代中期末の一時期に遺跡の東西で内容的に大きな差がない古墳群が形成されるという状況が想定できるかもしれない。

なお、当調査区では地表下10cmという極めて浅いところで遺構面を検出した。このような状況は周辺一帯でも十分に予想でき、今後とも周辺の開発には慎重を期す必要があることを指摘しておきたい。

## 第V章 山ノ上遺跡第14次調査の成果

### 1. 調査の経緯

本調査は、個人を施主とする専用住宅の建て替えに伴う事前発掘調査として実施したものである。1998年5月7日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づき、同年6月16日に試掘調査を実施したところ、現地表マイナス約1mの洪積層（低位段丘層）上面において、厚さ約10cmの遺物包含層とともに、古墳の周溝とみられる溝状の落ち、並びに円筒埴輪の破片数点を検出した。これまでに実施した周辺部での試掘所見と比較すると、遺構面は相当に深く、通常の木造家屋程度の基礎であればとくに問題とされるものではない。しかし今回は地盤改良が予定されているため、改良工事対象面積約81.5m<sup>2</sup>を対象に調査を実施することとなった。調査は、1998年7月1日より7月31日までの日程を得て実施した。



第50図 調査範囲図 (1 : 300)



第51図 調査地点位置図 (1 : 5000)

## 2. 遺跡の概要

### 2. 遺跡の概要

山ノ上遺跡は、豊中市のはば中央部、轟中台地と通称される標高20m前後の低・中位段丘上に立地する集落遺跡である。遺跡の範囲は立花町の一部、山ノ上町、宝山町のはば全城を包括する。阪急宝塚線岡町駅の徒歩圏にあたることから、市域でも早くから宅地開発の進んだ地域である。近年では都市域に多くみられるミニ開発が主体的に行われ、これまでに実施された調査も比較的小規模なものに限られる。集落全体の様相についてはなお不明な点が少なくないが、遺跡の時代や性格を推定するに足るいくつかの事実がこれまでに明らかになっている。

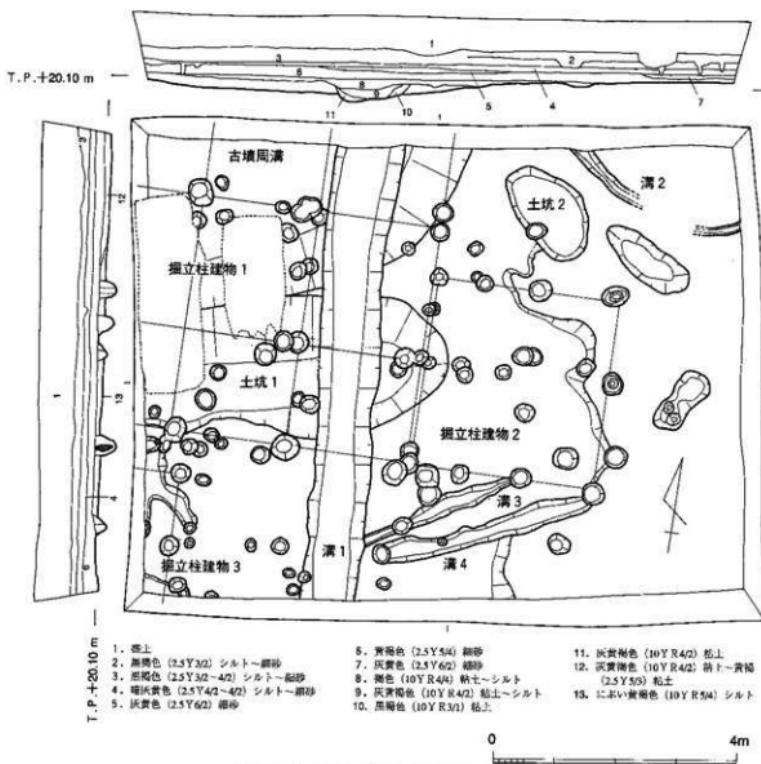
既往の調査について概略を記すと、まず第3、6次調査地点で検出した弥生前期の溝が遺構としては最も古く、前期中段階の壺、甕とともに、縄文晩期（長原式）とみられる深鉢の破片が出土した。つづく弥生中期では、現在までのところ第12次調査地点で円形住居の一部が検出されている以外、土器片がわずかに出土しているに過ぎない。弥生後期以後になると、遺構、遺物に若干増加の兆しが見られ、とくに第6次調査で検出した後期の堅穴住居覆土から、円文の鋳出された小型仿製鏡が出土している事実は特筆される。古墳時代では、各地点より布留式土器をともなう柱穴が検出されている他、第9次調査地点より前期の小型丸底壺をともなう方形周溝墓とおぼしき溝が検出されている。また第5次調査地点で検出した中期初頭頃の3棟の堅穴住居は、遺跡の東方に展開する桜塚古墳群築造の背景を考える上で重要である。後期の遺構としては、第7次調査地点の4棟の堅穴住居（MT15型式）、第8次調査地点の3棟の堅穴住居などが比較的まとまった遺構として注目され、新免遺跡や本町遺跡など、須恵器生産を背景に発展したとみられる集落との関係の解明が今後の課題である。飛鳥時代の遺構、遺物はさほど多くは認められないが、第11次調査地点で7世紀前半代のピットが検出されるなど、集落の存続は疑い得ない。しかし奈良時代末から平安時代になると、現伊丹街道北側に位置する第8次調査地点より、方形掘形の柱穴を伴う建物群が出現する他、第6次調査地点より平安後期とみられる建物が検出されるなど、集落のあり方に画期が見出せる。なお第1次調査地点より寺院もしくは経塚の可能性が考えられる梵字瓦が出土している。

以上のように、いずれも断片的な調査成果であるとはいえ、当遺跡が弥生時代前期から中世に至るまで、長期に亘り連續と営まれた集落遺跡であることが示唆される。しかしその具体的な性格については、なお今後の調査に期されるところが多いというのが現状である。

## 3. 調査の成果

### （1）基本層序

これまでに周辺部で実施した試掘調査の所見からすれば、調査地点付近の地表面（洪積層上面）は、深い場合でも現地表からおよそ50～60cmの深さから検出されるものと予想された。し

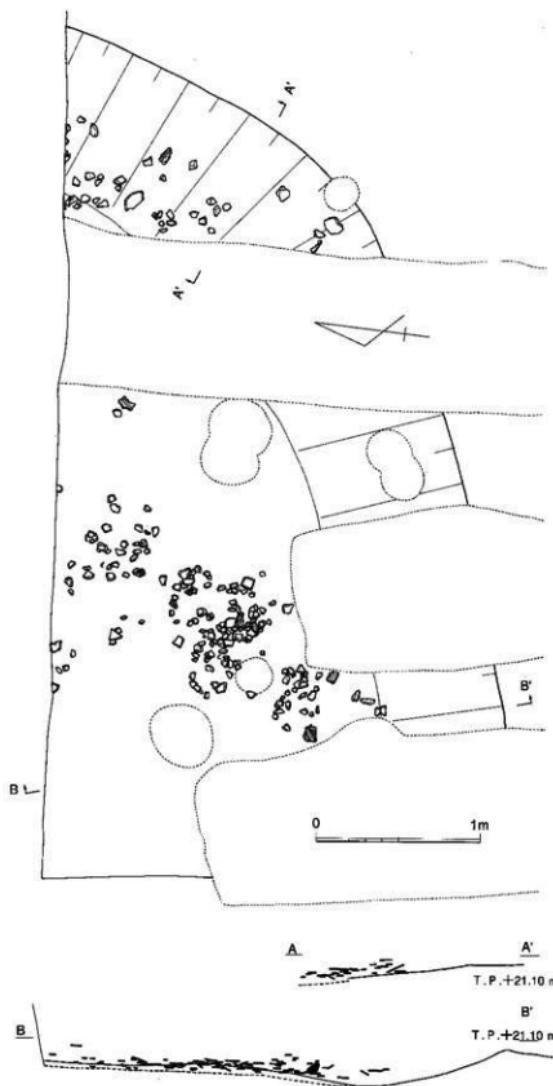


第52図 調査区平面・断面図 (1:80)

かし試掘調査の結果、水田面に厚さ約50cmの盛土が施されており、地山はこの水田面からさらに約50cm下から検出された。水田直下の黄褐色土層（第7層）は3層程度に細分され、おそらく中世集落廃絶後、すなわち13世紀以降の耕作土の一部が残存したものとみられる。第7層の下は基本的に地山となるが、調査区の中央から西側にかけて地山が約5cmの深さで窪み、この部分を埋めるように褐色粘土～シルトが堆積していた。埋土には12～13世紀の土器が含まれ、検出したピットの多くがこの埋土上面から掘り込まれていることからすると、おそらく建物を建てる際に、あらかじめ凹所を平坦にするために置いた整地土である可能性が高い。

## (2) 検出した遺構・遺物

検出された遺構は、古墳時代後期と中世の2時期に分かれる。古墳時代の遺構として、埴輪



第53図 墓輪出土状況 平面・断面図 (1 : 30)

片を伴う周溝とみられる落ち込みと、それに接して検出された土坑状の落ちがある。一方、中世の遺構として、掘立柱建物2棟以上、溝3条、土坑2基、落ち込み1ヶ所、ピット約50個がある。以下、主だった遺構について説明する。

古墳周溝 調査区の北西コーナー付近で検出した古墳周溝の一部とみられる土坑状の落ちである。中世の溝1によって遺構が部分的に破壊され、しかも確認調査ならびに事前着工に伴う削削によって、遺構の一部にさらに損傷を与えたことにより、遺構本体の形状推定に支障をきたす結果となっている。ここでは必ずしも明確ではないが、多量の埴輪片の出土を根拠に、古墳周溝として説明を行ないたい。

まず遺構の形状についてみると、南側のライン(肩部)が西側部分でやや直線的である

のに対し、東側部分は北側に丸く屈曲する。全体として円弧を描くようにもみられるが、肩部の傾斜が全体に緩慢であるため、遺構の輪郭はさほど明確ではない。検出部分の規模は、東西5.3m、南北3mを計測し、最大深度約20cmで、中央付近が最も深く、調査区北西コーナー付近に向かってやや浅くなる。覆土は暗灰色粘土のはば単一層で、比較的短期間に埋没したものとみられる。

覆土中には多くの埴輪片が含まれていた。埴輪片は出土位置から大きく2群に分かれる(第53図)。遺構東側の一群は、肩部に近い位置からまとまって出土した。量的には少ないので、中世の削平時に相当量が失われた可能性も考えられる。埴輪片はいずれも肩部斜面からやや浮いた位置から出土し、おそらく周溝内が流土でわずかに覆われた後に、遺構の東側から流れ込んだものと推定される。一方、西側の一群は、遺構深度が最も深い中央付近から一定の広がりをもって出土した。中でも北端から出土した一群は、南側肩部からみるとやや距離が離れており、必ずしもすべての埴輪片を南側の肩部付近から流入したものとみることはできない。

したがって当遺構を古墳周溝とみた場合、上に述べた遺構の形状や埴輪の出土状況を根拠として、本来の墳丘の位置を明らかにすることは難しく、この点については、今後周辺部の調査によって明らかにできることを期待したい。

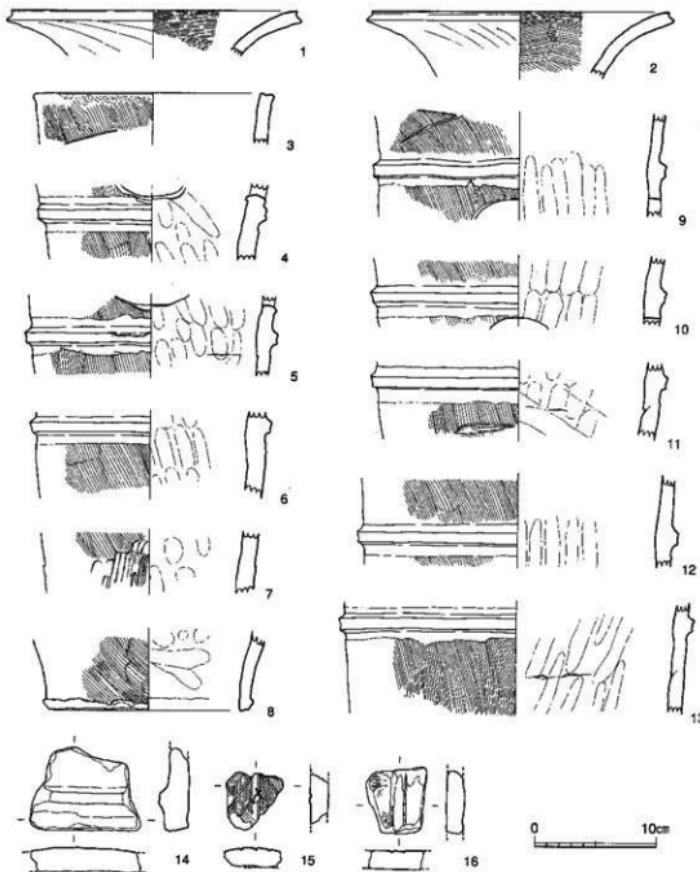
**土坑1** 古墳周溝の南側から検出した浅い土坑状の落ち込みである。検出した長さ5m、幅2.4m、深さ約10cmで、にぶい黄褐色粘土を覆土とする。出土遺物は極めて少なく、埴輪片5点を数えるにすぎない。時期は古墳周溝とほぼ同時期とみられるが、その性格は判然としない。

**古墳時代の出土遺物** 古墳時代の遺物として、古墳周溝、土坑1の他、中世の遺構から出土したものがある(第54図)。埴輪片が大半で、圓化できなかったが若干の須恵器片がある。図示したもののうち、12は土坑1から出土した。円筒埴輪には普通円筒と朝顔形埴輪があり、その他若干の形象埴輪がみられ、いずれも細片化している。円筒埴輪の大半は固く焼きしまり、須恵質、半須恵質のものが多いが、外面の色調において橙色系のものと灰色系のもの2種に分かれようである。ただし色調の異なる個体間において、調整や突帯の形状など他の要素にとくに違いは認められず、外面の色調の差は単に焼成時の条件に基づくものである可能性が高い。また円筒埴輪はその大きさから、口径20cm前後のもの(3~8)と24~29cmのもの(9~13)に分かれるが、大きさの異なる個体間においても焼成や技法に大差は認められない。調整技法については、いずれも外面を左上がりの粗いハケ(4~5本/cm)、内面を縱もしくは斜め方向のナデによる。透かし孔の形状は確認できるものはすべて円形である。突帯は断面形が台形か、若干上面を窪ませる程度のもので、概して幅が狭く、突出度も低い。ほとんどが別個体の破片とみられ、段数は不明である。

1、2は朝顔形埴輪の口縁部である。口径は1が23.2cm、2は24.4cmで、口縁端部に向かって大きく外反する形状をもつ。口縁端部は強いナデにより深く窪み、上端部は鋭利に仕上げる。外面上半部には左上がりの丁寧なナデ、下半部に回転ナデを施し、内面には平行もしくは斜め

### 3. 調査の成果

方向の粗いハケ（4～5本/cm）が施される。3は円筒埴輪の口縁部、9もヘラ記号の存在から最上段を含む破片とみられる。3の口縁端部は朝顔形埴輪と同様、ナデによる凹面をなす。ヘラ記号は右上がりの直線が1本だけ認められるが、9とは逆の「<」の可能性が考えられる。9はおそらく最上段とみられる破片の外面に、上部の欠失のためやや不明瞭であるが「>」のヘラ記号が刻まれ、その下段に円形の透かし孔をあける。円形の透かし孔をもつものとして、他に4、5、10がある。8は最下段の破片、7も外面のタタキ目の存在から最下段の可能性が



第54図 墓輪（1：4）

高い。7は破片下部に、ハケ調整後に施された縦方向のタタキの痕跡が認められる。タタキの条痕のうち凸部が不明瞭なのは、粘土の乾燥が不十分なため、粘土が工具に付着したことによるのであろう。8は底部破片としては器壁がやや薄く、端部外面に再調整による折り返しの痕跡が認められる。ただし端面は丁寧なナデによる凹面をなす。14～16は形象埴輪の破片である。円筒埴輪の多くが須恵質もしくはそれに近い焼成であるのに対し、形象埴輪はいずれも内外面、断面ともに土師質である。14は家形埴輪もしくは圓形埴輪の底部破片とみられる。厚い板状で、底部よりやや上に低い突帯が付く。左右の断面は部分的に弧を描くようにもとれるが、ほぼ直線とみてよい。15は外面に3本の沈線と綾杉状の文様を刻む。左右の断面は丸く、円筒形を呈するともみられるが、本来の形状は不明。16は板状の破片で、外面に2本の沈線を刻む。

**掘立柱建物1** 調査区の北西部で検出した建物跡で、東西2間(3.9m)以上、南北2間(3.9m)以上の規模を有する。柱穴は直径25～40cm、深さ25～40cm前後で、2～4個の柱穴が1ヶ所に重複していることから、建て替えが行なわれたと推定される。柱間は各部分で異なるが、検出範囲が限られるため、規模、構造ともに判然としない。建物の方位はほとんど真北に近い。

**掘立柱建物2** 建物1の東側に接する。柱穴の配列はあまり整然としたものではないが、していえば東西3間(3.0m)、南北2間(3.1m)程度の規模であろうか。近接した位置関係から、建物1の部分的な拡張(増築)を示すものとも考えられる。方位は建物1と同じくほぼ真北である。

**掘立柱建物3** 建物1の南側に、建物1・2と同じ方位で並ぶ2個の柱穴がある。直径30cm～35cm、深さ40cm前後で、柱間は1.2mを測る。方位を共通にしながらも、柱穴ラインがずれることから、2つの建物とは別の建物である可能性が高い。

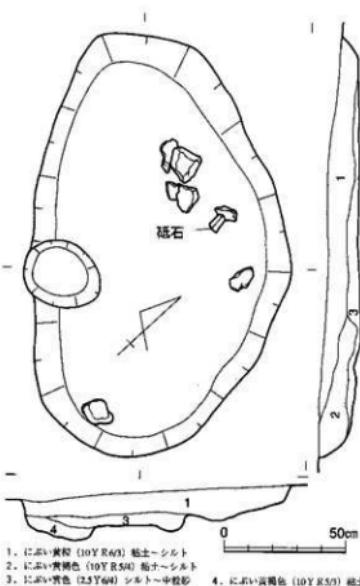
**溝1** 建物や古墳周溝と重複して検出された溝で、検出した長さ7.5m、幅0.9～1.1m、深さ20～27cmを測る。検出面は整地土とみられる第8層の直下で、中世の整地土が置かれる直前の時期に機能していた溝と考えられる。埋土上層から若干の瓦器片や土師器片、埋土下層から埴輪片が出土した、中世に掘り込まれた用排水路とみられるが、厳密な時期については不明である。走行方位はN-4°-Wである。

**溝2** 調査区の北東隅で検出した検出長3.3m、幅12～25cm、深さ3cm未溝の小規模な溝である。平面形が円弧を描くことから、当初堅穴住居の壁溝である可能性も考えられた。しかし埋土は上層の中世の耕作土と同質で、時期的には新しい。

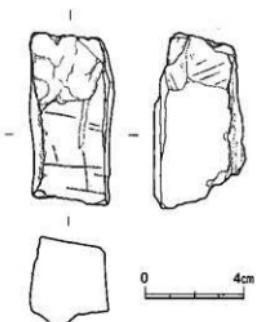
**溝3・4** 調査区南側で検出した2本のほぼ平行する溝で、第8層の整地土上面で検出した。検出長は3.5m未溝で、削平により大半が消失してしまったものと思われる。幅15～40cm、深さ10cm以下の浅い溝で、建物が廃絶して後の耕作に伴う鋤溝である可能性が高い。走行方位は溝3がN-58°30'-E、溝4がN-66°50'-Eである。

**土坑2** 建物2の北側で検出した長楕円形を呈する土坑で、長径1.75m、短径1.1m、深さ約22cmを測る。埋土は3層程度に区分され、このうち上層から拳大の礫6個がややまとまって出

### 3. 調査の成果



第55図 土坑2平面図・断面図 (1:20)



第56図 砥石 (1:2)

した。砾群中から出土した1点の砾石を含めて、いずれも外部からの流入によるものとみられる。砾石の出土から墓の可能性も考えられたが、積極的な根拠はない。なお土坑1の東側から検出した2基の土坑状の落ち込みは、出土遺物もほとんどなく、根の浸食によるものであろう。

上層から出土した砾石（第56図）は、上下が欠損し、残存する長さ7.1cm、最大の厚さ3.7cmを計測する。粒子の細かい砂岩質とみられ、黄白色の色調を呈する。2面は使用にともなう平滑な磨耗面を呈するが、他の2面は部分的に磨耗の痕跡を認めるものの、凹凸の著しい粗面を残す。磨耗面のカーブの形状から本来の長さは10cm前後の小さなものであったと推定される。

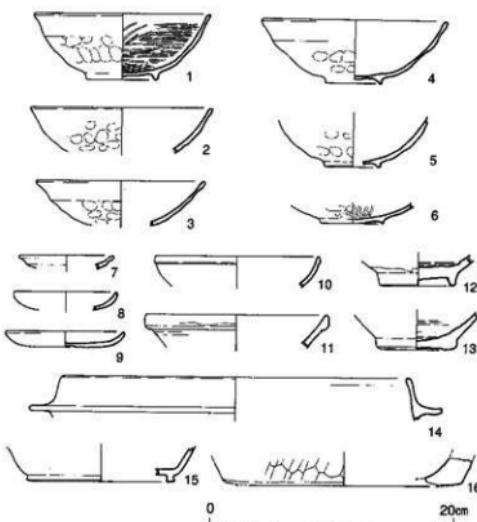
**ピット** 直径40cm以下の小規模なものが大半を占める。ただし30cm以上の深さをもつものが比較的目立ち、いずれも建物の柱穴である

可能性が高い。したがって実際に存在する建物は、今回想定した2棟を越えるものと推定されるが、調査範囲が限られているため、正確な数は不明である。

**中世の出土遺物** ここでは建物の柱穴、ピット、第8層、溝1などから出土した遺物について取り上げる。一部を除き、確実に造構に伴うとみられるものはなく、すべて混入遺物とみなされる。まず瓦器碗（第57図1～6）についてみると、1は体部が丸く、口径に対する器高の割合が高い。径が大きく、断面台形のしっかりした高台が付く。外面は下半を指サエ、上半を丁寧なヨコナデ

により調整し、内面には口縁部を除いてほぼ全面に比較的密なハラミガキを平行に施す。また底部内面に格子目状のミガキを施す。瓦器碗の編年によるII～III期頃に比定され、今回出土した中では最も古い特徴を示す。2～5は1に比べ器高が低く、外面の調整も指サエによる凹凸が激しい。いずれも磨滅が著しく、ミガキの痕跡は観察できない。また6の底部は断面三角形の貧弱な高台が付き、内面にはミガキの痕跡が観察さ

れる。7は瓦器の皿である。以上のうち5が高台や体部の形状にやや古い特徴を留める以外、いずれもⅢ-1~2期頃に比定されよう。8、9は土師器小皿である。磨滅が著しいが、瓦器碗の年代観とも齟齬はない。10~13は白磁の碗である。10は器壁が薄く丸い体部で、口縁部に小さな玉縁をもつ。釉は施されていたとしても非常に薄く、内外面ともに明るい灰白色を呈する。輸入陶磁器の分類によるⅡ類に比定されるものであろう。11、13は典型的なⅣ類の白磁碗である。11は体部が直線的



第57図 出土土器 (1:4)

に開き、口縁部に大きな正縁をともなう。釉はやや黄みがかった灰色を呈し、口縁部から体部上半に及ぶ。13は削り込みの少ない分厚い高台から体部が直線的に開く。乳灰色の施釉が内面にだけ行われ、見込みには3本の沈線がはしる。12は削り込みの深い、高い高台を有する。乳灰色の釉が内外面ともに施され、外面の釉の一部は高台にまで及ぶ。見込みには沈線状の明瞭な段を有する。高台の形状と施釉の範囲からみる限り、V類の特徴に近い。14は土師器の羽釜である。小片のため口径は推定による。15は溝1から出土した須恵器の杯である。奈良末~平安に比定されるが、周辺からは該期の遺構が検出されており、必ずしも溝1の時期を示すものではない。16は石鍋の底部破片である。小片のため底径は推定にもとづく。外面には成形時のシャープな削り痕がみられ、ススが付着する。

#### 4.まとめ

今回の調査は、非常に限られた面積にもかかわらず、古墳、中世の各期にわたる比較的密度の高い遺構、遺物が検出されるところとなった。中でも埴輪をともなう古墳周溝の一部とみられる遺構の検出は、その性格にやや曖昧さを残してはいるものの、当遺跡で初めての知見として注目される。これまで山ノ上遺跡の北側に隣接する新免遺跡において、前方後円墳1基を含む5基の古墳が調査によって確認されている（新免古墳群）が、出土した埴輪の特徴からみる限り、今回検出した遺構もほぼ同じ6世紀前半に比定されるものである。これが確実に古墳に

#### 4. まとめ

ともなうものであれば、新免古墳群の範囲がこれまでの想定以上に広がりをもつことが示唆され、この点については今後、新免遺跡南部の様相をさらに詳細に把握することにより明らかにしうるものと考える。

一方、中世の遺構についても、第8次調査地点を除くと、これまでに行われた周辺部での確認調査においても知見にのぼることはなく、今後該期の集落の所在についても留意していく必要がある。昨年度に実施した現伊丹街道南側に位置する第12次調査地点において、11世紀後半から13世紀に至る集落の所在を確認したが、今回検出した遺構を含めて一連の集落にともなうものである可能性が考えられる。当該地のかっての村名である毒木が、文献にあらわれる止止岐莊由来するものであれば、今回検出した中世遺構は第12次調査地点の集落跡とともに、まさに止止岐莊に関わる遺構群である可能性も想定され、丘陵部開発の進展と莊園村落の形成過程を明らかにする上で、今後とも慎重に調査を進めていく必要があろう。

## 第VI章 山ノ上遺跡第15次調査の成果

### 1. 調査の経緯

当調査区は、豊中市宝山町20に所在する。個人住宅の新築に伴って、試掘調査を行なったところ、構造面と遺物包含層が良好な状態で検出された。上部構造物の基礎に関しては掘削深度が浅く、埋蔵文化財への影響はなかったが、地下室の配置部分 ( $11.4\text{m}^2$ ) については調査の必要があると判断され、平成10年（1998年）9月16日から9月30日までの日程で調査を実施した。

### 2. 調査の成果

#### （1）既往の調査

山ノ上遺跡では現在までに14回の調査が行なわれており、弥生前期～中世にわたる各時期の遺物や構造が検出されている。遺跡の中央部～南部では、どちらかというと弥生～古墳時代の

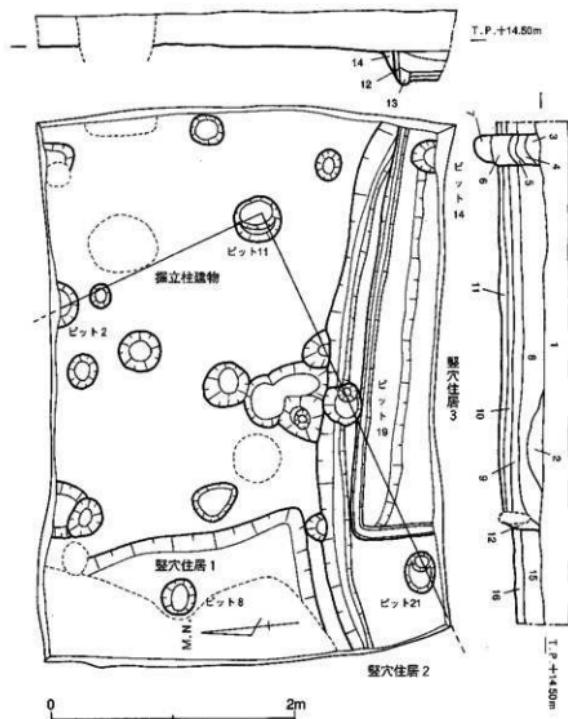


第58図 調査範囲図 (1 : 500)



第59図 調査地点位置図 (1 : 5000)

## 2. 調査の成果



第60図 検出遺構平面・断面図 (1:40)

遺構が多く検出され、第7次調査地点では古墳後期のカマドを持つ方形堅穴住居群が、第10次調査地点では古墳前期の方形周溝墓なども検出されている。今回の調査地点は遺跡の南部にあたるが、付近でも第6次調査地点では弥生前期の溝や弥生後期～終末期の円形堅穴住居から小形仿製鏡などが出土したほか、古墳前期のピット群や平安後期の掘立柱建物が検出されている。

一方、遺跡の北部にあたる第1次調査地点では、礎敷きの遺構から五輪塔を配した捺印瓦や梵字瓦などが出土し、同様に瓦片が出土する雨落溝が存在することなどからも、平安末～鎌倉の寺院が存在した可能性が指摘されている。第1次調査地点と近接した第8次調査地点では、方形で大形の柱穴を持つ掘立柱建物群が主軸方向の異なる数群のまとまりで検出されており、平安時代（一部は奈良に遡る）を中心に集落が展開していたことが明らかにされた。平安後期

1. 瓦の棒土。2. 砂。3. 黒褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。4. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。5. 黄褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。6. 黄褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。7. 黄褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。8. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。9. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。10. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。11. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。12. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。13. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。14. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。
1. 瓦の棒土。2. 砂。3. 黒褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。4. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。5. 黄褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。6. 黄褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。7. 黄褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。8. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。9. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。10. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。11. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。12. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。13. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。14. 黑褐色 (IVY R 4/2) 壁面 (「シート」)。

以降になると、遺跡全体（支尾根上）に集落が展開するようである。

また、遺跡内の北半部を中心に埴輪片が少量ながらも散見される。第14次調査地点では古墳の周濠と考えられる遺構が検出されるなど、今までに認知されていない古墳群の存在が考えられ、北東方向に近接する新免古墳群との関わりが注目される。

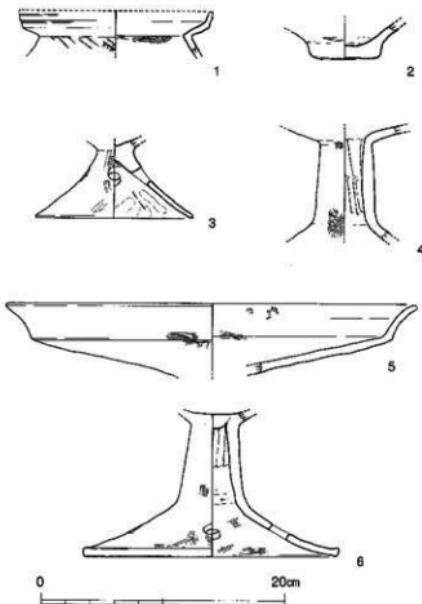
## (2) 検出した遺構

調査区内では、わずか $11.4\text{m}^2$ に面積が限定されたにもかかわらず、21基のピット、竪穴住居3棟が検出された。以下にその概要を記す。

**ピット** 各ピットは平面の形状、深度等が異なり、調査区内で建物を構成する柱列を復元できたものは、わずかであった。ピット2、11、19、21は掘立柱建物を構成するものである。概ね直径40cm程度、遺存した深さ約30cmを測り、ピット11で確認された柱痕は直径約15cmであった。復元できる建物は、2間×2間以上の規模で調査区外へひろがる。柱間はピット11～21が約1.6m、ピット2～11が約1.8mを測る。掘立柱建物の場合、概して桁行方向の柱間が狭くなる

例が多く見受けられることから、ピット11～21側の柱列が桁行方向である可能性が高い。時期的にはピット19の埋土に須恵器（杯身口縁部破片）が含まれていたことから、古墳後期の建物であろうと考えられる。建物主軸は磁北に対しN-70°-Eで東に傾く。

**竪穴住居** 検出された竪穴住居3棟のうち、竪穴住居1は調査区西端部の搅乱坑等によって著しく破壊され、ほとんど原型を留めていない。おそらく方形住居の南東隅付近を検出したものと考えられるが、遺存した深さも5cm未満と浅く、詳細は不明である。ただし、搅乱坑との境界付近に焼土ブロックが分布しており、カマドを伴っていた可能



第61図 出土遺物 (1:4)

## 2. 調査の成果

性が考えられる。

竪穴住居2は調査区の南壁沿いに検出された。竪穴の輪郭は中央部ではほぼ直線的であるが、調査区の東西端部ではやや曲線を描き、一辺約5mの隅丸方形の平面プランが想定される。遺存した深度は約25cmで、竪穴の掘形に沿って上部で約20cm、底部で約10cmの幅を持つ壁溝が検出されている。後述する竪穴住居3が重複しているため、住居埋土のほとんどが再掘削され、貼床等も明確には確認できなかった。

竪穴住居3は竪穴住居2の内側に検出された方形住居で、壁溝を伴う。住居の東側は調査区外へ広がる可能性が高く、規模については不明である。遺存した深度は約30cmで、断面観察によれば明らかに竪穴住居2に後出である。埋土中から出土した土器類は碎片が多く、時期決定が困難であるが、概ね弥生後期後半～終末期の範疇で捉えておきたい。

### (3) 出土遺物

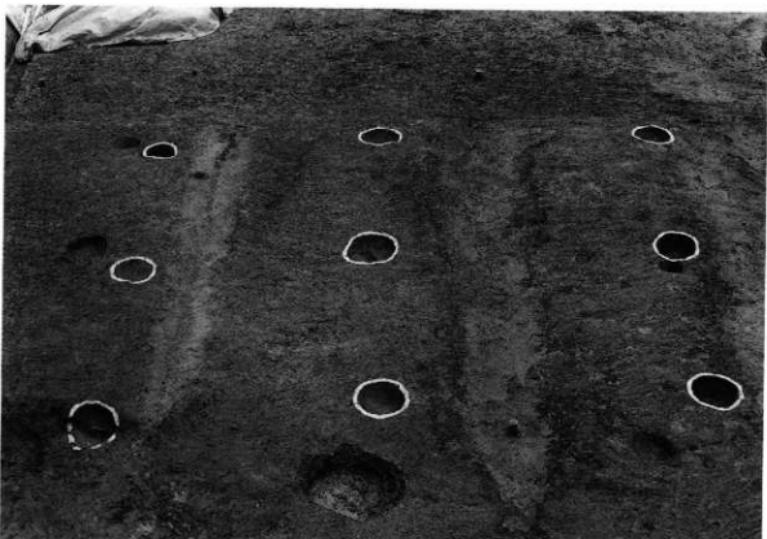
第61図1～2は竪穴住居3の埋土中から、3はピット8、4～6はピット14から出土したものである。1は壺の口縁～体部上半にかけての破片である。口縁端部を受け口状に立ち上げさせたタイプで、体部外面は右下がりのタタキで成形され、ハケメ調整を行なう。口縁端部外面には凹線状の装飾が施されている。2は壺の底部破片である。体部下半は球形に大きく膨らむものと推定される。3は高杯の脚部破片である。脚部は斜め下方向に向かって直線的に聞くタイプで、4方向に円形の穿孔がなされている。4は高杯の脚柱部破片で、脚据部は欠損している。脚柱部は中空に成形され、杯部との接合は円板充填手法であった可能性が高い。5～6の高杯は、ほぼ同一個体と見なすことができるが、確実な接合点が判明しなかったため、ここでは別個体として図化した。5は杯部破片であるが、受部と口縁部の高さがほぼ等しく、口縁部の外反は強い。そのため、受部との接線は明瞭である。6は脚部破片で、裾部にかけての屈曲が顕著で、脚柱部は中空に成形されている。杯部との接合は円板充填手法によるもので、脚部内面にいわゆる「柄」(へそ状の粘土のたれこみ)が見られる。4方向に比較的大形で円形の穿孔がなされている。

## 3.まとめ

今回の調査では、調査範囲が限定されていたこともあるが、集落を面的なひろがりでとらえることができなかった。しかしながら、比較的濃密な遺構分布であり、各遺構の形成時期が接近しているという調査地周辺での弥生後期～終末期の集落の様相を垣間みることができた。また、多くのピット群の存在は、古墳～平安時代に至る建物群の存在を示唆しており、今後面的な調査が行なわれることによって、平安時代を中心とした建物群の遺跡南半部への拡大時期や丘陵上の開発についての動向を詳細に知ることが可能になるであろう。

# 図 版

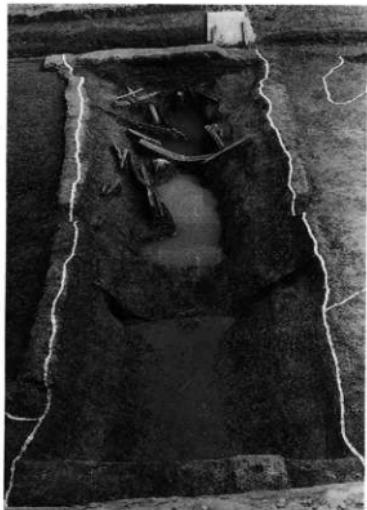




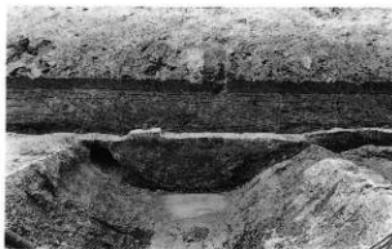
(1) 第1面南半部全景(南から)



(2) 第2面全景(南から)



(1) 溝 1 全景（西から）



(2) 溝 1 断面（東から）



(3) 溝 1 木材出土状況（東から）



(4) 井戸 1（南から）



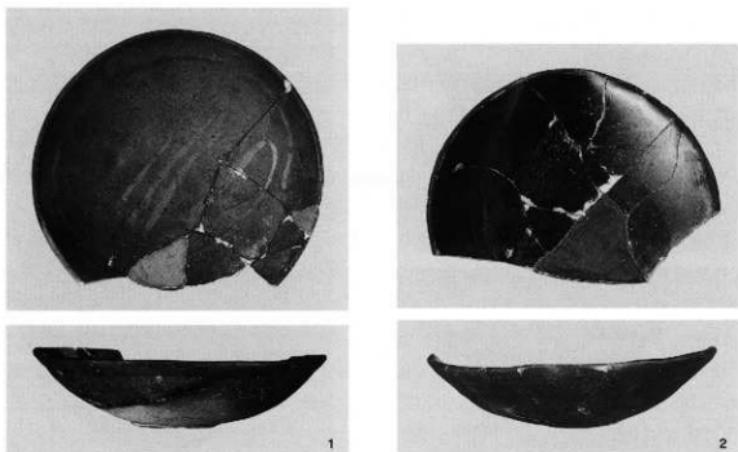
(5) 井戸 1 側面（南から）



(6) 土坑 1 土器出土状況



(7) 落ち込み 1 土器出土状況

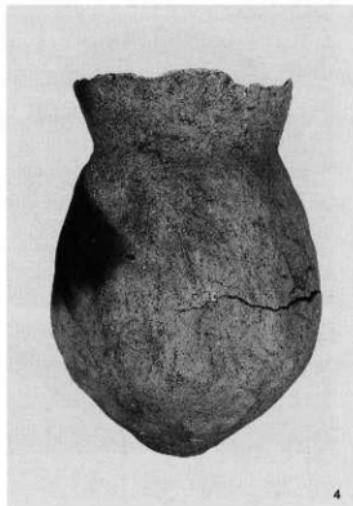
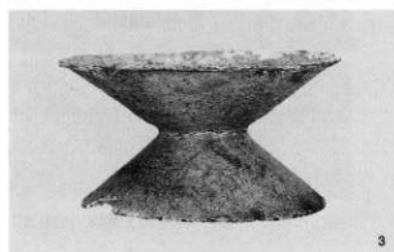


(1) 溝1出土遺物（第9図）

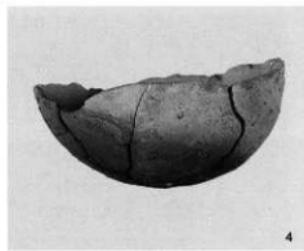
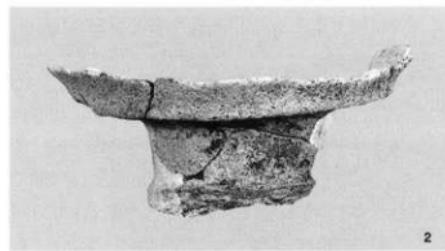


(2) 井戸1出土遺物（第8図）

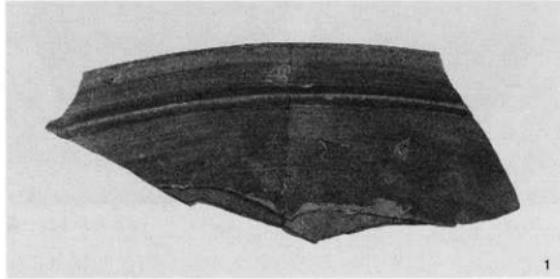
圖版 4  
小曾根遺跡第25次調査



(1) 土坑1出土遺物（第10図）



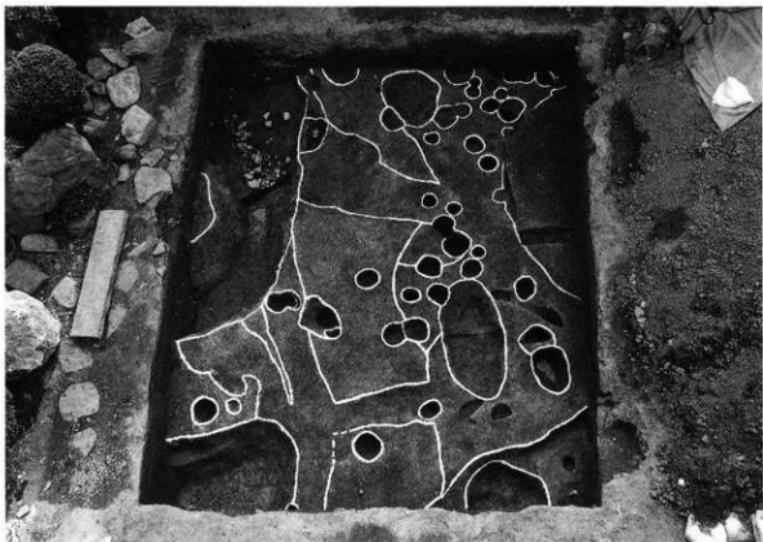
(2) 落ち込み1出土遺物（第11図）



(3) 包含層出土遺物（第12図）



(1) 遺構完掘状況（第49次調査区北部）



(2) 遺構完掘状況（第49次調査区南部）

図版 6  
新免遺跡第  
48・49次調査



(1) 遺構完掘状況（第48次調査区）



(2) 住居1完掘状況（南から）



(1) 住居1土層断面(東から)



(2) 住居1壁溝断面



(4) 住居1炉断面



(3) 住居1土器出土状況



(5) 住居1炉上層土器出土状況



(1) 溝 2 中層土器出土狀況



(2) 溝 2 下層土器出土狀況

圖版 9 新免遺跡第48・49次調查



(1) 溝1・2土層断面



(2) 溝4土器出土状況



(1) 住居 2 完掘状況（第48次調査区）



(2) 住居 2 完掘状況（第49次調査区北部）



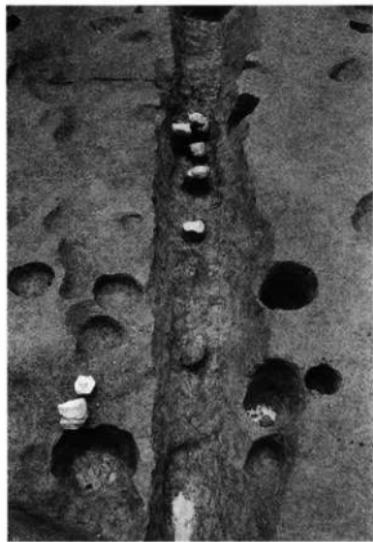
(1) 土坑 1 土器出土状況（西から）



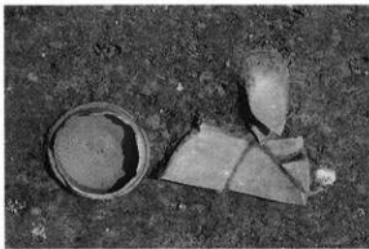
(2) 溝 6（南から）



(1) 溝7土層断面（第48次調査区）



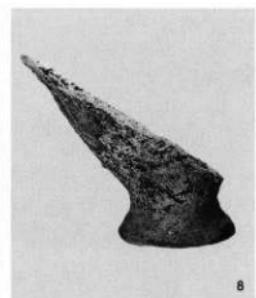
(2) 溝5完掘状況（東から）



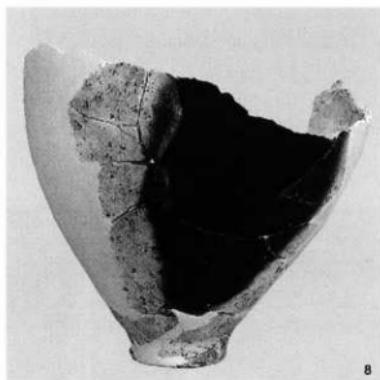
(3) 溝7土器出土状況（第48次調査区）



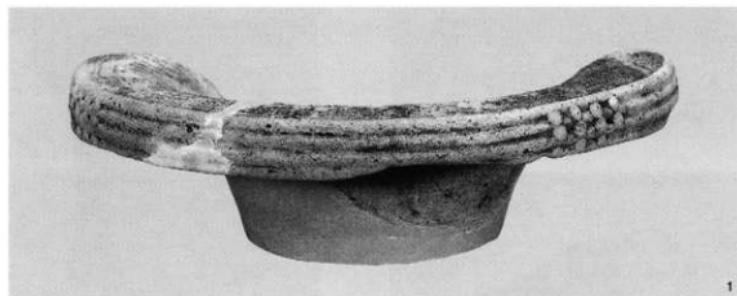
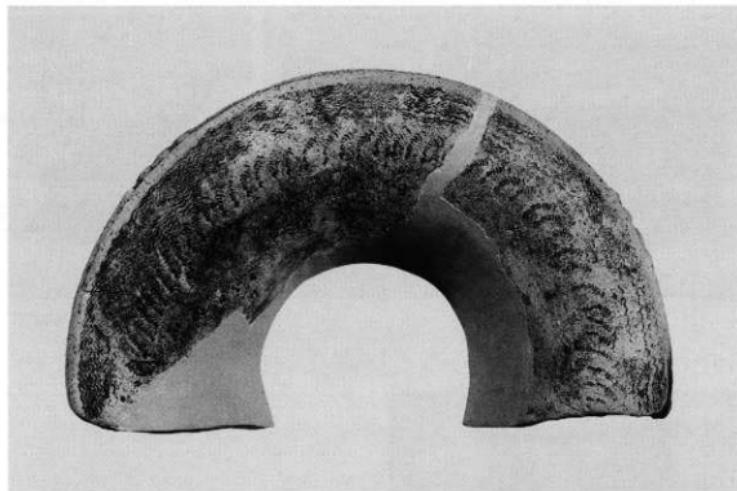
(4) 溝8土器出土状況（北から）



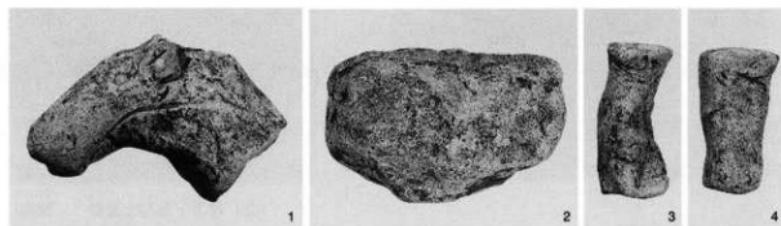
(1) 住居1出土遺物 (第19図)



(2) 溝2下層出土遺物 (第24図)



(1) 溝2中層出土遺物（第23図）



(2) 溝6上層出土遺物（第39図）



(1) 住居2出土遺物 (第34図)

← (2) 住居3出土遺物 (第34図)



(3) 土坑1出土遺物 (第37図)



5



3

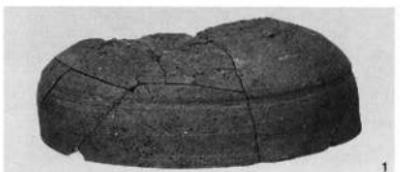


4

(4) 溝7出土遺物 (第41図)

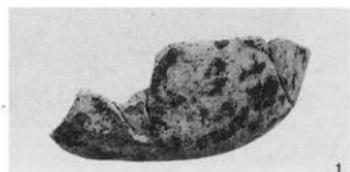


7



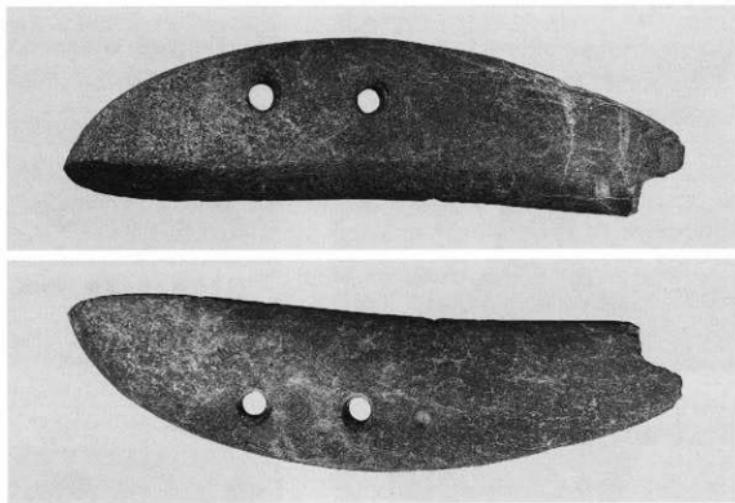
1

(5) 溝8出土遺物 (第42図)

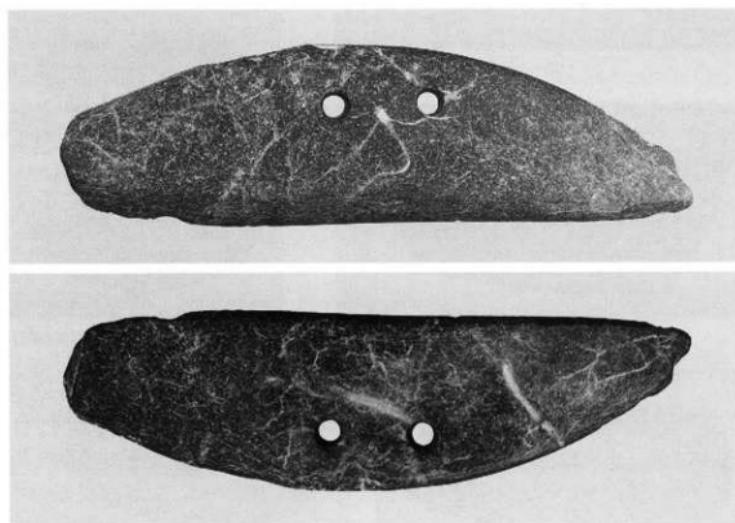


1

(6) 土坑2出土遺物 (第44図)



(1) 溝2下層出土石包丁（第28図）



(2) SP-56付近出土石包丁（第45図）



(1) 遺構完掘状況（北から）



(2) 溝1断面



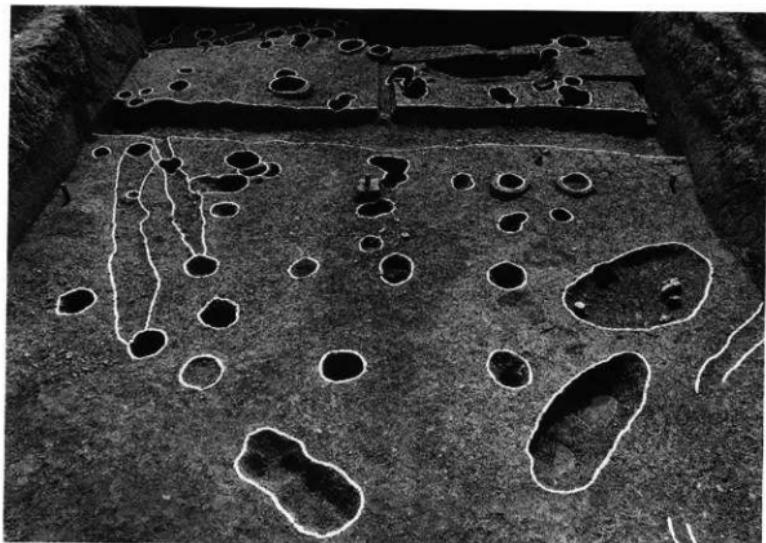
(1) 古墳時代遺構（東から）



(2) 古墳周溝 墓輪出土状況（南から）



(1) 中世遺構検出状況（東から）



(2) 中世遺構完掘状況（東から）